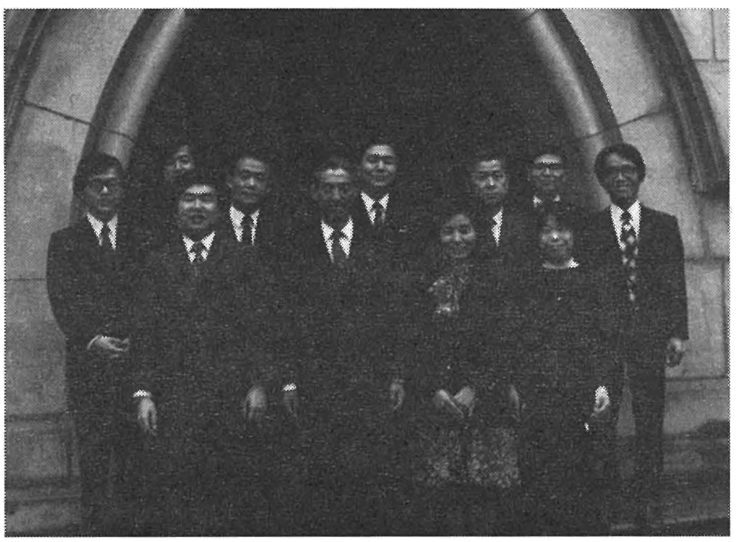
近藤和彦教授

近藤和彦教授　ロング・インタビュー

2011年2月24日　於山上会館

クリオ：本日はお忙しいところ、インタビューをお引き受けくださり、ありがとうございました。例年クリオでは編集部と先生の1対1でインタビューをやっているのですが、今年は趣向を変えて、編集部3名に、インタビュアーとして後藤はる美さん、伊東剛史さん、辻本諭さんの3人と、院生4名と、学部生5名が加わって、オープンな形で開催させていただくことにしました。では、早速インタビューに入らせていただきます。

まず先生のテーマの流れからお話をうかがわせていただきたいのですが、先生が学部生、あるいは院生でいらっしゃったころの研究室の雰囲気や交流について教えていただければと思います。



近藤：　はい。これは1973年、ぼくたちが修士を修了したときの写真です。そもそもなんで西洋史に進学したのかということで、駒場時代の話をしなくちゃならないと思うのですが、ごく簡単にします。（ぼくは）1966年に東大の駒場に入学しました。その年は、ビートルズが来た年でもあるし、サルトル、ボーボワールが来た年でもある。東大が入学定員を3000人以上にしたのもぼくたちのときからで、これまで東大に入れなかったおバカさん達が入学してくる、と東大教授たちが身構えた時代です。同時に、例えば経済学部は、以前は今の法学部研究棟を法学部とふたつに割って使っていましたが、赤門脇に新しい経済学部棟ができたのも66年です。東大が変わったといいますか、以前の帝大から、現在我々が知っているような東大になった時代なんですね。でも、駒場で授業に出ていて、西洋史関係には何ひとつ面白いものがありませんでした。信じられないぐらい退屈で、「もうこんなの嫌だ、西洋史だけじゃなくて歴史学って嫌だ」って思いました。念のために言いますと、その頃は西川正雄先生や木村尚三郎先生が赴任される2年前で、駒場の歴史学の底辺の時代だったような気がします。で、面白いと思ったのは折原浩の社会学とか城塚登の社会思想史、そして京極純一の政治学で、そういうのをやっているうちに、マックス・ヴェーバーはすごく重要で面白いんだってことが分かってきました。社会学に進むことも考えたんですが、東大の社会学は、社会調査みたいな実証とその理論化ばかりやっていて、ヴェーバーだ、デュルケームだなんてことはほとんどやってないということが分かってきました。そこで大塚久雄の経済学部か、堀米庸三の西洋史かってことになったわけですが、

大塚先生は68年で定年退官し、堀米先生がドイツ中世史でそれなりに面白いということで、堀米先生のところで勉強するつもりで西洋史に進学したわけです。その堀米先生は（前掲写真の）真ん中にいらっしゃる背の高い先生で、73年3月で定年退官なさるんですね。堀米先生と林健太郎先生とが同い年で、林先生は4月から東大総長になるというので、この大学院の修了式・証書授与のときには欠席なさったわけです。右端のぼくから順に、伊藤貞夫先生、柴田三千雄先生、城戸毅先生が見えますが、もう一人成瀬治先生がなぜか欠席ですね。このときの助手が、この桜井万里子さんとドイツ史の山本秀行さんで、松本宣郎さん、本間さん、福井憲彦さん、毛利晶さんが同期で修了しました。というわけで68年に東大西洋史に進学してみたら、堀米先生をはじめとして、授業は大変面白かった。駒場と本郷はまるで違うんだって認識して、「文学部に進学してほんとに良かったなー」って心から思いました（笑）。非常勤の先生も含めて、全ての先生の授業が面白いと思いました。思ったんですが、6月15日から例の東大闘争が始まって、18ヶ月の無期限ストライキになり、面白い授業を聞くことはできなくなりました。その18ヶ月の間は、マルクスやヴェーバー、そして宇野経済学や大塚史学の関連を読んだり、ビラを書いて配ったりと、それなりに充実した期間を過ごしていました。

中世史をやるつもりでいたんですが、18ヶ月が終わって再び授業が始まってみると、残念ながら堀米先生は東大闘争で大変に傷ついて、「師弟関係の崩壊」という文章を『中央公論』に書いておられましたが[1]、ダメージが大きかったんだと思います。弟子とのパーソナルな関係をすごく大切にする方だったんです。そういう点で、68年6月までの授業と、70年から再開した授業では、まるで違うなと思いました。投げてるとは言わないけども、すごくクールな授業になっちゃった。逆に面白いと思ったのは柴田先生の授業でした。それから、無期限ストの間に色々歴史関係の論文など見たりするなかで、ぼく自身の堀米先生を見る目も変わってきていました。堀米・吉岡論争[2]というのが1960年にあって、そんなもの、68年の学生は読んでなかったんですが、無期限ストがあったからこそ、そういうのを振り返って読むことになりました。そこで堀米先生はすごく甘い、旧制高校風のヒューマニスティックな観点で、星菫派ですね[3]、全人的な研究や教育ということをおっしゃっていた。むしろ吉岡さんはサイエンスとしての歴史学、しかもそれをやる場合に古代史と中世史は一騎当千の優秀な研究者が1人ずついれば十分で、あとは全員近代以降、近現代史に集中すべきであるというかなり乱暴な議論をしていました。そのころのぼくは「その通りだ！」、「中世史なんかやってる場合じゃないんだ」って（笑）、なかなか偏った判断をしました。しかもその際に、我々がやるべきなのは

---

[1] 堀米庸三「師弟関係の崩壊—大学における処分とは何か」『中央公論』第83巻第9号（1968年9月）、54-66頁。

[2] 堀米庸三「回顧と展望—総説—」『史学雑誌』第69編第5号（1960年）、165-171頁；吉岡昭彦「日本における西洋史研究について—安保闘争のなかで研究者の課題を考える」『歴史評論』第121号（1960年9月）、2-12、54頁；堀米庸三「綜合的歴史観への一提言—吉岡昭彦君への答にかえて」『歴史評論』第123号（1960年10月）、2-12頁。

[3] 近藤和彦『文明の表象　英国』（山川出版社、1998年）82-89頁。

資本主義社会の根本矛盾を明らかにすることであり、資本主義社会はイギリスから始まったんだからイギリス史をやるべきだという風な、イデオロギー的な決断で始めたわけですね。イギリス史の先生はいませんでした。でも柴田先生は色んなことの分かった人だったし、昔のご自分と似たようなものを感じたのかも知れません。ずいぶん可愛がってくれたと思います。そういうわけで近代史、産業革命そのものを対象にと思ったんですが、産業革命についての研究は（すでに）それなりにありました。でも、具体的な史料を使って自分自身で何か分析できるものはないかと探すと、たまたま坂巻清助手の尽力で、東大西洋史に18世紀マンチェスタのローカルな新聞2種類（のマイクロフィルム）が入っていました。同時代のパンフレットの復刻もありました。そこで、それらを使って、当時のイギリス史の主流だった大塚史学の再検討みたいなことをやってみたわけです。当時はマニュスクリプトを見るなんて誰も夢にも思わなかったことで、18 世紀の新聞をちゃんと読んで卒業論文を書くことは前代未聞という時代でしたから、絶賛してくださる先生もいらっしゃいました。

クリオ： 先生は「産業革命前夜の民衆運動、マンチェスタ 1757～58 年」[4]という題目で卒論をお書きになったわけですが、このテーマ選択は史料を含め色々な実際的な理由による選択だったのですね。テーマを選ばれた頃、これがライフワークになるという思いはありましたか。

近藤： いえ、なかったです。むしろ19世紀以降の近現代の資本主義社会の矛盾を明らかにするというのが究極の目的だったわけですから、卒業論文は手近なところで、今ある材料でこぢんまりと、民衆運動といっても労働組合を結成しようとして弾圧された事件と、食糧蜂起について面白いことが分かるので、それをやった。でもその後はちまちましたことではなく、もっとスケールの大きいことをやるというつもりでいました。

クリオ： そのあと、修士論文は「18世紀イングランドにおける食糧騒擾と地域行政」[5]という題目で書かれたわけですけれども、それでは修士論文は「ちまちましたことではない」テーマを選ばれて、そのようにされたのでしょうか。

近藤： ちょっと修正しますが、ちまちましたテーマっていうのは実際そのときに自分自身で感じたことだったんです。（卒論のテーマ選択は）1757～58 年にマンチェスタで起こった二つの事件について新聞やパンフレットが読めるから、ということでもあったんですが、同時に、内田義彦という人に注目していました。（彼は）経済学史、アダム・スミスの前から後にかけて経済学がどういう風に出来上がってきたかということを歴史的に考察している理論家・思想史家ですけれども、「NNN」というペンネームで正統派を批判した大変な秀才ということで知られていました。その内田義彦さんの『経済学の生誕』[6]という本を読んでみると、その始まりが独特だった。要するに、アダム・スミスを、ただの経済学者とか、イギリスの思想家と

---

[4] 同題で『社会運動史』第2号（1973年）、第4号（1974年）に改訂版が掲載されている。
[5] 『史学雑誌』第82編第12号（1973年）に、これをもとにした大会報告要旨が載っている。
[6] 内田義彦『経済学の生誕』（未来社、1953年）。

かいうのじゃなくて、ルソーとの関係、ヨーロッパ全体の危機観のなかに位置づける、しかも、内田さんによれば、1755 年にポルトガルのリスボンで起こった大地震が、ヨーロッパ中の知識人たちに、もうヨーロッパ文明のおしまいかもしれないという危機観、あるいは転換の感覚を植え付けたっていうんです。要するに 1750 年代が、ヨーロッパのあらゆる学問を考える場合にものすごく重要だっていうことを最初に言ってるんです。その 50 年代の後半に、アダム・スミスは *Moral Sentiments* 『道徳感情論』を出すわけですし、その前後にグラスゴー大学およびエディンバラ大学での講義がいくつも続いて、最後に『国富論』になるわけですが、その、『道徳感情論』から『国富論』にかけてのアダム・スミスの問題意識とヨーロッパ文明の危機感覚がすごく出ていると思いました。ですから、堀米・吉岡論争を読んだ時の、ぼくの頭はすごく粗っぽかったと思いますが、内田義彦さんを読んで、もう少しデリカシーのある判断としてね、1750 年代を私がやることにはそれなりに知的な意味があるんだという風に、位置づけ直しました。それで、大学院に無事進みまして、いろんなものを読みましたけれど、内田さんの影響を受けた平田清明という方がいらして、当時、名古屋大学から京都大学に移ったばかりだったんですけど、全国から秀才たちを集めて合宿をやってたわけ。ぼくもそこへ行かせていただいて、琵琶湖のほとりの合宿に、完全なよそ者として参加したなんてこともありました。その平田清明さんて人は『思想』に毎年のようにすごいインパクトのある論文を書いておられて、良かったですね。Private とか privacy という言葉にどういう歴史的意味があるのか、ということから始まって、たとえば新幹線の列車のドアに'private' って書いてあると、そのすぐ下に日本語で「業務用」って書いてありますよね。「なんで private が業務用なんだ？」ていうことから説き起こして、『資本論』の価値論を料理して、『思想』の一本の論文書いちゃうわけです[7]。思想史ってこういう学問なんだと、ものすごいインパクトがありました。だから平田さんに読んでもらえるような論文を書こう、という感じでいたんです。

で、卒論ではマンチェスタの 1757～58 年をやりましたが、修士論文ではそれより広げて、18 世紀にイングランドとスコットランドで続発する食糧蜂起をやろうと。マンチェスタは一つの特殊な例かもしれない、ローカル・ガヴァメントの対応に地域差もあるはずだから、生産力・生産関係の違いじゃなくて、行政や地域エリートの違いを考慮に入れながら全国的な絵を描き直してみたいということもあって、食糧騒擾と地域行政というのを書きました。それで、そのコピーを平田先生のところに持って行ったら、先生は早とちりして、「近藤君、これすごい面白い、マルクスがちょうど恐慌について書いてるその年じゃないか」って言うんです。1856～58 年は確かにマルクスが恐慌について書いてるんですが、ぼくがやってるのは 100 年前と遠慮がちに申し上げたら、「あぁ、そうだ……」。エキサイトした表情がガクッと 2 オクターブくらい下がったのを目撃したこともあります。

クリオ：　先生は博士課程に進学されたあと、まもなく東大西洋史の助手に就任され、その

---

[7] 平田清明「範疇と日常語—市民社会と唯物史観」『思想』526 号（1968 年）など。のちにこれらを集めて『市民社会と社会主義』（岩波書店、1969 年）として刊行された。

あと名大講師に転任されて留学もされるわけですが、まずは助手時代のお話をうかがわせていただきます。今と比べて助手に就任する時期がとても早いですが、先生が助手でいらっしゃったときの研究室の雰囲気はどういうものだったのでしょうか。

近藤： はい、73 年で修士からドクターに進んで、ドクターに入ったときのぼくと研究室の雰囲気っていうのは、この写真に現れています。桜井助手が辞めるので桜井さんを送るために皆で山中湖へ行ったんですけれども、深沢（克己）先生、石井（規衛）先生も映っていますね。

会場： えー!!（笑）

近藤： （笑）ぼくはここにいます（右から二番目）。こういう人たちと楽しくやってました。ぼくはこのときはただのドクターの院生でしかないわけですけれども。当時は学振のフェローシップとかそういうものもありませんでしたし、助手の話がドクター2 年の夏にあったときに、ぼくは豊かな家の出身じゃないし、すでに結婚していたわけだから、月給取りになることはすごく嬉しかったです。初任給が 83000 円ぴったりだったことはよく覚えています。といっても、当時の助手（助教）というのは 2 人体制でしたから、ぼくの同期で 2 歳年上の松本宣郎がアドミニストレーションはみんなやってくれました。お金の処理なんかぼくはやらせてもらえなかった。ぼくはただ月給をもらって、研究室の図書を購入して、勉強をして、それから院生や学部生を集めて読書会みたいなことをやって、そういう学問のままごとをやって助手時代を過ごしたわけですから、とても良かったと思います（笑）。ただまあ、1 つイギリスの民間の基金で留学生試験を受けて、1 次試験で落とされたという屈辱的な思い出もあります（笑）。

東大の学部生・院生・助手のときを通じてずっとイギリス近代史の先生はいらっしゃらなかったわけですが、大学院に入ったときに、柴田先生が指導教官ですけれども、高橋幸八郎さんの演習にも出てみました。戦後歴史学の大塚・高橋史学っていうように、大変な先生であるはずなんですけども、その大学院の授業に出てみたら、東大の経済学部から内部進学で経済学研究科にくる院生たちは一人も高橋先生の授業をとらない。高橋先生の授業をとったのはぼくと、梅津順一っていうクリスチャンと、もう一人、森建資の 3 人。あとはアメリカ史の誰かがいたかもしれない。3 人ないし 4 人だったんですけれども、二度三度出てみる間に、内部進学の学生たちが高橋先生の授業に出ない理由がよく分かりました。全く意味がない、生きてる

化石っていう言葉がありますけれども。若い頃の高橋さんがいかにパワフルだったとしても、晩年といっても57〜8歳の高橋先生は、何の意味もない人になっちゃってた。ただ、高橋さんが任務としてやり続けたのは、彼が眼を付けたイギリス・フランスの歴史家を呼ぶことです。たとえば、ヒル[8]やホブズボームを呼んだのも彼だし。ぼくがホブズボームと初めて会話を交わしたのはこの高橋先生が東大の社研で開いた研究会でのことですから、そういう点ではきちんとお礼を申し上げなくちゃなりません。日本でぼくが影響を受けた3人の先生（柴田三千雄氏、二宮宏之氏、遅塚忠躬氏）がここに並んでいますが、高橋先生も含めて専門はフランス史です。でもこの4人はそれぞれ、日本のフランス史研究者のなかでは珍しく、イギリスに一目置いている人たちだったと思います。フランス中心主義はどうしてもあるんですが、イギリスもフランスとは違う、もう一つの文明社会・文明国家であるというリスペクトは持っている人たちだったから、そういう点でぼくは――彼らにとっての情報源という意味もあったんだと思いますが――大切にしてもらいました。今ぼくがあるのも、高橋先生はちょっと棚上げして、3人の先生方のおかげだと思います。70年代には、イギリス史では今井宏先生や松浦高嶺先生、それから浜林正夫先生が非常勤講師でいらっしゃいましたけれども、あまりシャープじゃないっていう気がして、影響は受けなかったですね。

で、『思想』の論文を校正しているころ[9]、名古屋から話があって名古屋大学に行くことが決まったわけです。ぼく自身の生まれは西日本ですが、小学校の後半くらいから関東平野で過ごしているので、名古屋に行くのは何だかとてもさびしい気分がありました。ぼくの歓送会なんてものはやってくれませんでしたが、西洋史の卒業生たちのコンパって今でもやりますよね。そのときにぼくは助手だったわけですから、そのおしまいまでいて会計を済ませて、会場だった農学部前の蕎麦屋から本郷三丁目まで歩く間にちょっと酔っぱらってたこともあって、柴田先生の言葉によると、「お前は電柱に抱きついて泣き崩れていた」そうです。どうもそうらしい（笑）。学部生を送る会なわけですけれども、自分自身もこれで、あぁ、別の世界に行くんだ、ってわけですね。しかし、実際には名古屋に行ってとっても良かったと思います。1977年、29歳の専任講師でしたが、そこで西洋史研究室に熱烈歓迎されました。ぼくより年上の大学院生もいて、

---

[8] Christopher Hill (1912-2003), 法政大学出版局より出版されている「叢書・ウニベルシタス」シリーズ中の『クリストファー・ヒル評論集』ほか、邦訳多数。

[9] 「民衆運動・生活・意識」『思想』630号（1976年12月）。奇しくもこの『思想』同号の巻頭には、ル＝ゴフ「歴史学と民族学の現在」が、二宮宏之訳・解題で載った。

土岐正策さんっていう古代ローマの方と、松塚俊三さんていう近代イギリスの人、2人ともぼくより年上ですけれども、よくしてもらいました。年下もふくめて、極めてフレンドリーといいますか、ファミリーといいますか。院生だけじゃないですね、学部生達も名大西洋史の学部生は大体1学年5人から10人の間で、もう皆お互いのプライヴァシーも知ってる。誰さんが誰さんにデートを申し込んで断られたとかいうことも、次の朝には伝わっちゃうような雰囲気で（笑）。そういう中で、いろいろ人間関係についても学びましたし、お金はなかったけれども勉強する時間は十分にあって良かったです。

丸1年経って78年の春に青木康君が、ぼくの4歳下ですけれども、南山大学の助手として赴任しました。名古屋大学と南山大学は、谷を挟んで背中合わせなんですよ。歩いて15分くらいのところにある。間に何もないんですけれども、歩いて行き来しました。青木君は授業をする助手で、午前中の授業が終わって、昼休みに名古屋大学のぼくの研究室に来て、昼食をはさんで2時間くらい雑談をして、「そろそろ3時だから帰る」とか言って帰っていくようなことを毎日やってました。1週間に6日、それをやってたと思います。その南山大学にはそのあとも、和田一夫をはじめとして、色んなイギリス関係、経営史関係の研究者が何人もきましたし、それから名古屋大学の英語の先生として今駒場にいる遠藤泰生君を始めとする人達もきました。それで30歳プラスマイナスの若手研究者のコミュニティみたいなものができて、もともといらっしゃるアメリカ史の野村達朗先生やフェミニストの安川悦子さんとの親交もあり、そういう点でもすごく良かったと思います。その時代あってこそのぼくなんだって思います。ただ、そういうことしてるうちにね、「近藤さんはこんなとこで楽しくやってちゃ駄目だ、早く留学しなさい」って背中を押してくれる老先生がいました。それはありがたかった。つまり、竜宮みたいなところで幸せになっちゃいそうなところを、そんなことしてちゃ駄目だってことです。ブリティッシュ・カウンシルの留学生試験を受けたら、幸い受かりまして、80年の夏から留学することになりました。留学する前と後とでは、ぼくも一応変身したつもりです。

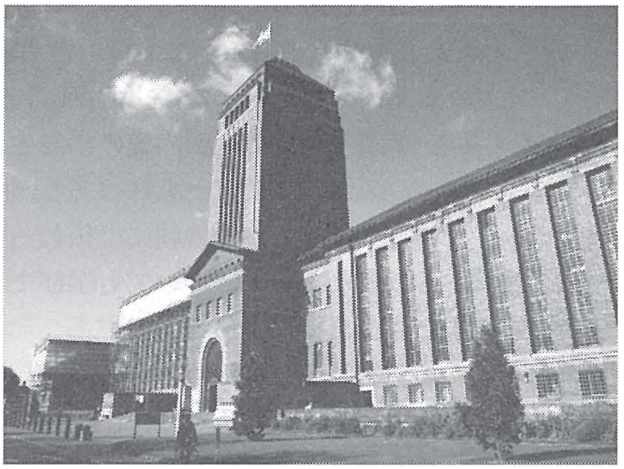
クリオ： ありがとうございます。その留学時代のお話をちょっと詳しくうかがいたいんですけれども、それではまず、先生の指導教官になられたボイド・ヒルトン先生[10]についてお話をお聞かせ願えますでしょうか。

近藤： ボイド・ヒルトン先生は、今でこそエヴァンジェリカルで時の人になってますけれども、1980年にぼくが行った時にはケインブリッジのトリニティ・カレッジの若手のフェローでいらした。研究者として第一線の、真面目な研究者ですけれども、教師としてはそんなに上手じゃなかったと思います。同じ時にオクスフォードから来て、ケインブリッジの秀才たちの教育を始めたのが17世紀のジョン・モリル[11]ですけれども、モリルの方が先生としてふさわしかったのかなという感じはしますね。

---

[10] Boyd Hilton (1944-), ケインブリッジ大教授。最近の著作に *A Mad, Bad, and Dangerous People? England 1783-1846*, Oxford University Press, 2006.

[11] John Morrill (1946-), ケインブリッジ大教授。後藤はる美訳「ブリテンの複合君主制　1500-1700年」『思想』964号（2004年8月）、76-92頁。



どういうことかって言いますと、ボイドのところに一定のまとまりごとに文章をもっていく。そうすると、英語として不完全なところも含めて、どういう意味なんだって 2 人でディスカッションする。それで、ぼくの英語の討論能力および文章能力が改善・改良されたのはいいんですけれども、ボイドは自分のセミナーを持ってなかった。で、ぼく自身が面白そうなセミナーを見つけてそこに行くと、「なんだ、ボイドも来てるじゃないか」みたいなこともありました。そのなかの一番典型的なのが、例のホント[12]とイグナティエフ[13]の *Wealth and Virtue*[14]っていう本になった、「経済学と思想」というセミナーだったんです。要するに、ボイドは、同じ年代の院生たちと仲良くなるチャンスを作ってくれませんでした。そういう点で、あんまりラッキーじゃなかったと思います。

ぼくはそもそもジョン・ブルーア[15]に教わりたいと思ってケインブリッジに行ったんですけれども、そのブルーアがぼくが留学したときにはいなくなってたわけです。これがケインブリッジの University Library 中央図書館で、ここに毎日通って勉強したのはいいんですけれども、ジョン・ブルーアがいないので、じゃあしょうがない、ブルーアと一緒に *Ungovernable people*[16]を書いてる若手研究者でジョアナ・イニス[17]とかいう、全然有名じゃないのがいるなぁ、と。その人がニューナム・カレッジのフェローだということで、彼女に手紙を書きました。そしたらすぐに会ってくれました。彼女のところでカレッジのランチをご馳走になって、色んな話が始まりましたし、それからもう 1 つ、すこし遅れて、81 年から大学院生になるジェイムズ・レイヴン[18]とのお付き合いも始まりました。2 人とも第一線の研究者で、それぞれの分野を今リードしていますけれど、人間的にすごく優しくて。留学生で

---

[12] Istvan Hont (1947-), ケインブリッジ大講師。田中秀夫監訳『貿易の嫉妬　国際競争と国民国家の歴史的展望』（昭和堂、2009）。

[13] Michael Ignatieff (1947-), ケインブリッジ大、ハーヴァード大等で教鞭を執る。現在カナダ下院議員。

[14] Istvan Hont and Michael Ignatieff (eds), *Wealth and Virtue: the shaping of political economy in the Scottish enlightenment*, Cambridge University Press, 1983.

[15] John Brewer (1947-), ハーヴァード大、UCLA などで教鞭を執る。近藤和彦編／大橋里見・坂下史訳『スキャンダルと公共圏』（山川出版社、2006 年）。

[16] John Brewer and John Styles (eds), *An Ungovernable People : the English and their law in the seventeenth and eighteenth centuries*, Hutchinson, 1980.

[17] Joanna Innes, オクスフォード大講師。最近の著作に *Inferior Politics: social problems and social policy in eighteenth-century Britain*. Oxford University Press, 2009. なお、『クリオ』第 10・11 号にインタビュー記事あり「インタビュー　ジョアンナ・イニスさんに聞く　ケインブリッジ／社会史／ポストモダン」『クリオ』第 10・11 号（1996／1997 年）

[18] James Raven (1956-), エセックス大教授。最近の著作に *The Business of Books: Booksellers and the English Book Trade 1450-1850*, Yale University Press, 2007.

あるぼくたちにとっては色んなことが不自由なわけですけど、それをスムーズにしてくれたっていう点で、感謝してもしきれないものがありました。同時に、ケインブリッジだけじゃあれだなってこともあって、ロンドンの Institute of Historical Research に月に2、3回通うことになって、ペニー・コーフィールド[19]にもそこで初めて会いましたし、80 年から 82 年の間に色んなことが始まったなーと思います。ただ、ブリティッシュ・カウンシルのお金は丸1年だけで、それで2年間頑張ったわけですけれども、それ以上延長することはできなかったわけですね。イギリスの色んな奨学制度にはアプライしましたし、2 年目からは、Vice-chancellors and principals of the universities and colleges of the United Kingdom 全国大学学長連盟の奨学金とかいうのを3年分取る権利は得たんですけれども、名古屋大学の専任講師でしたし、3年目に突入したら直ちにお前はクビだなんていう手紙が名古屋大学の主任教授から2度来たりしました。それから一緒に来ていた7歳と5歳の子供たちが日本語をしゃべらなくなって、家庭でも英語でしゃべる。妻がそれは大変に心配して、日本語忘れちゃったら日本人でなくなる、もう帰りましょう、ってこともあって（笑）、82 年の秋に、泣く泣く日本に帰ってくることになりました。

クリオ： ありがとうございます。先ほどのお話では、イニス先生やレイヴン先生といった、今でも親交のある色んな先生方とのご交流が留学時代から始まったということでしたけれども、この留学を通して先生ご自身のテーマに対するご理解もやはり変わったと考えてよろしいでしょうか。

近藤： はい。日本にいた時は、イギリス史研究会で時々コメントしてもらえるだけで、近代イギリス史の先生の誰からも指導されていませんでした。たとえば今井宏先生などはぼくのことを、どうやって扱えばいいのかわかんなかったんでしょう。ぼく自身を教育し直すために、イギリスでちゃんとした指導を受けるべきだということで、ケインブリッジに行ったわけだし、その時には食糧蜂起とか民衆文化とかをテーマにしていないボイド・ヒルトン先生についたわけです。要するに、オーソドックスな経済政策史や政治史を勉強し直すんだと、これで初めてぼくはイギリス史の専門的な勉強ができるんだというつもりで行きました。それまで日本でぼくがしてきた仕事で既にペーパーもあったわけですから、半年くらいはそれを英語にしてボイドと討論してたわけですけれども、結局じゃあぼく自身のテーマとして、論文として何ができるかってことで、やはりマンチェスタの 18 世紀だろうということになりました。

サー・ロジャー・ニューディゲイト Sir Roger Newdigate という、大地主でオクスフォード大学選出の庶民院議員が残した日記は、ネイミア学派の人達がよく使うんですけれども、ものすごく詳細なわけ。1センチの幅に3行ぐらい、とんでもない小さい字で書いてあるような日記で、ウォリックシャの Record Office にあります。その彼が何故かマンチェスタの色々な社会問題について議会で発言している。新しい法案を提起したりするわけですよね。それは結局、彼がいるオクスフォードの

---

[19] Penelope Corfield、ロンドン大教授。坂巻清・松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃　1700-1800 年』（三嶺書房、1989 年）。

Brasenose カレッジがマンチェスタの教会・教区に対して色んなインタレスト、利害を持ってるからだってことは後で分かりましたけれども、そういったことで、議会史と社会史の関連のあるイシューについてやれる、しかもそれがネイミア批判になるということで、要するに食糧問題を含めた 1750 年代の色んな社会的なイシューにニューディゲイトがどういう風に関わったかっていうことから攻めていこうってんで、ジョン・マニーやウォズワースの仕事がイメージにあったんですが、少なくとも博士論文の一つの大きなチャプターにはなるということで始めたわけです。そういうことを分析するために、マンチェスタの色々な事件や団体に登場する人物のプロソポグラフィのカードを作り始めました。当時はエクセルなんてないわけですから、B6 のカードに手書きでどんどん書いていくわけですけども、それがいっぱいいっぱい貯まってくる。毎日 3 枚も 4 枚も増えたりすると、なんだか嬉しい気分になって、それをジェイムズに見せたりすると、'impressive!'なんて彼喜んでくれるから、こっちも嬉しくなって（笑）やってました。でも、じゃあそれでどういう議論が立つんだって問題は先送りです。ボイドが 3 ヶ月だけオーストラリアのキャンベラへサバティカルで行っちゃったときに、副指導教官としてヴィック・ギャトレル[20]っていう、19 世紀のマンチェスタの商人、コマーシャル・ミドルクラスについてやってる先生が代わりにぼくを見てくれたわけですけれど、彼は「カードは良いけれども、アーギュメントだよ、アーギュメント。みんなお互いに関係していましたって以外にアーギュメントがないじゃないか」っていう風に言われて。プロソポグラフィって、この会場でも半分くらいの人がやってるんじゃないかと思いますけれども、やってると楽しいんですよね（笑）。これは同姓同名の親子で違う人だったなんて分かると、それだけでもうすごい発見したような感じになるでしょ。それは一種の阿片みたいな効果があると思いますね。だから、アーギュメントに組み立てるところでなかなか苦しみました。でも、時間不足で帰ってくるということになったんですね。その間に、リンダ・コリ[21]との関係が 81 年から始まりました。当時ケインブリッジはディプロマっていうコースから始まって、丸 1 年経つと Ph.D.コースに上がる。上がったら、ディプロマのときの分も加算して考えるということで、そのアップグレードするときに審査教官になったのがリンダ・コリでした[22]。この時期にもう 1 つやってみたいと思っていた仕事が史料編纂で、数年後に'The Workhouse Issue at Manchester'として部分的に実現しました[23]。ぼくの公にした仕事で国際的引用の一番多いペーパーです。

クリオ： ありがとうございます。それでは、ご帰国なさってから『民のモラル』をお書きになって、その後、先生のご関心が民衆文化から政治社会の方へと移っていく一連の

---

[20] Vic Gatrell, エセックス大教授。最近の著作に *City of Laughter: Sex and Satire in Eighteenth Century London*, Atlantic Books, 2007.

[21] Linda Colley, プリンストン大教授。川北稔監訳『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会、2000）。

[22] この間の事情と図書館、文書館について、「剣橋放談：18 世紀イギリス社会史とその若手研究者たちの巻」『イギリス史研究』No. 33（1982 年）がある。

[23] K. Kondo, 'The Workhouse Issue at Manchester Selected Documents, 1729-35', 『名古屋大学文学部研究論集史学』第 33 巻（1987 年）、1-96 頁。

過程について伺いたいと思います。ご留学からお帰りになった後、特に80年代から90年代半ばにかけまして、先生は大変多くのお仕事をなさっているわけですけれども、歴史家として先生のキャリアを見たとき、この頃はどういう時期だったというふうにお考えでしょうか。

近藤： 82年のおしまいに帰国してからはかなり不幸な思いでした。ロンドンやケインブリッジでそれなりに苦しかったけれど充実していたのが、突然名古屋の、史料なんて何もないところへ再び引き戻されたわけですし、マンチェスタの詳しい話を学部の講義でやっても、皆ポカーンとしてて全然反応がないわけですし、ほんと泣きたいような気分でいたわけです。けれども、同時にその頃から岩波の『思想』の編集者たちとの関係が深まっていきました。この関係は留学前にすでに始まっていて、修士論文を充実させたものが『思想』の「1756年～57年の食糧蜂起について」（上・下）っていう論文になるわけです。1979年に『思想』で社会史特集号っていうのが出ますが、この論文は実はそれのために準備していたものなんです。社会史特集の編集が1年近く遅れたのに、ぼくの原稿はもうできちゃった。じゃあ先に載っけようっていうので、上・下に分けて78年12月、79年1月に載った。そのやり取りのなかで、岩波の合庭惇っていう秀才との付き合いが始まっていました。70年代は合庭さんは使いっ走りをやるような若手だったんですけども、ぼくが留学から帰って来てみるともう編集長で。東大の哲学を出ててぼくの2つ年上ですけども、色んなことを彼に教わりました。しかも、『思想』に書くと一定の原稿料が入る。そういうこともあって、モティベーションたっぷりで『思想』に随分書きました。ぼく自身がそもそも留学前から社会史って言ってたということもありまして、社会史関係のホーガースの図像分析から始まって、そういうことを書くと、とてもリスポンスがいい。『思想』の編集者も学界での反応もとても良い、というので、ほいほい調子にのって書いているところがありました。『民のモラル』は「食糧蜂起について」っていう先ほどの『思想』の論文がほんとの中核にあって、それにホーガースの分析とか、色んな社会史・文化史的なチャプターが合わさって、民衆文化における制裁の儀礼を論じる本になったわけですね。副題は「近世イギリスの文化と社会」となっていて、翌年の書評で、全然近世じゃない、つまりテューダ朝もステュアート朝も論じてないじゃないかっていうのがありました。それはその通りなんですが、当時、まだ「長い18世紀」っていう言葉は辛うじて、ペニー・コーフィールドなんか使い始めてたけども、日本ではまだ使えないなと思って、妥協的に近世という言葉を用いたのですけども、今から考えるとやはり「長い18世紀イングランドの文化と社会」という副題にした方が良かったなと思います。つまり、1660年も含む、1830年代も含む、長い18世紀というわけです。ですから、『民のモラル』は、1993年の秋に本になりますが、1970年代からのぼくの仕事の総括っていう意味もあるし、同時に、実は「歴史のフロンティア」っていう企画を通して山川出版社が教科書会社から、しっかりしたアカデミックなバックグラウンドのもとに面白いシリーズを出す出版社に変身するきっかけにもなったわけです。

クリオ： 『民のモラル』の冒頭には、「女房売り」というとても面白いエピソードがあります。そのつぎにヒューディブラス、更にホーガース、といった、とても印象に残る

引用やエピソードが多く用いられていますが、こうした史料を用いることや、インスピレーションの源はいったいどういうところにあるか、教えていただけますか。

近藤： 議論の独創性はあったと思いますが、史料については、法制史的なものも含めて、それほどオリジナルとは思っていません。70年代の終わりから80年代に図像分析が盛んになっていたということもあるし。そうですね、例えばホーガースのスキミントンの版画はナタリ・デイヴィスも、E・P・トムスンも使っている。しかしそれは挿絵としてであって、絵の内容については分析してない、できていない。じゃあぼくがやろう、ということもありました。美術史の人たちはブリューゲルのこういう要素をホーガースはこういう風に利用しているとか、フランスにおけるロココはこうやってカリカチュアライズされているといったことを論じているわけですけれど、ぼくはそういったことより17、18世紀のイギリスの歴史を知っていると、こういうシンボリズムが面白いんだと。それをホーガースがどういう風に表現しているか、ということで分析してみた。自分で面白いと言うのもなんだけど（笑）、授業でやると学生の反応もいい（笑）。『民のモラル』のあとがきに書いてありますが、10近くの大学で非常勤講師も含めて、ホーガースについて随分とやらせてもらいました。

クリオ： ありがとうございます。それでは次のテーマ、民衆文化から政治社会へというところに移らせていただきます。

まずは転換のきっかけについていくつか質問させていただきます。先生は長く民衆文化や政治文化について扱われているのですが、ある時点から政治社会というものへ転換しているように見えます。これはまず、そもそも「転換」という理解でよろしいのでしょうか。

近藤： 転換といえば転換ですけれど、要するに、民衆文化についての研究はもう『民のモラル』で極めた、という印象が個人的にあります。これ以上何が言えるんだ、ということですね。それと、91年にE・P・トムスンの *Customs in Common* が出て、彼のモラル・エコノミー論に対する批判に対する反批判がありましたが、それを読んで、あートムスンもあまりプロダクティヴでなくなった、と感じたこともあります。それから93年秋に『民のモラル』が出て、94年の前半は大学院重点化のためにこき使われて大変な思いをしたのですが、その秋からロンドンに客員で1年半行きます。そこで、やはり自分がやる仕事は最初の留学の時以来中断しているマンチェスタの18世紀だと思いましたし、日本語で書いてもイギリスでそれは全然読んでもらえないわけですから、英語で読んでもらえる仕事をしたいと思ったわけですね。あとは、ナタリ・デイヴィスの仕事からすごい影響を受けてますけれど、彼女もやはり民衆文化そのものというよりは90年代からディアスポラの研究というものに向かっていったし。純粋な民衆的なものとかローカルなものというよりは、もうちょっとクロスした、複合的で地域的に飛んでいくような、現代的な問題との関わり

の中で発言できるようなテーマに移って行ったような気もする。そういったことも間接的に影響していたと思いますが、とにかく94年95年はロンドンで——あまりまとまった仕事は発表していませんけども——色んな事を考えました。94年9月にはAJCの最初の大会もありましたし、1つの転換、ぼく自身にとっての転換であるだけじゃなくて、日本のイギリス史にとっても転機だったと思います。

それからもうひとつ、95年のお終いまでロンドンにいて、96年1月に日本に帰ってきてみたら、96年度からとりわけそうなんですが、東大がなんだか昔と違った。ぼくが本郷に助教授として来たのは1988年ですけども、88年から94年までなんだか友達社会の感じで楽しくやっていたのが、94年、95年から大学院重点化するわけですけど、その結果もあって、雰囲気が随分変わった。要するにサイエンス、業績主義ということになっちゃって。いろんな競争資金が入ってくるけれども、なんだかみんな忙しくて、落ち着いて考え、立ち入って議論し、友達づきあいするなんてとてもできないという雰囲気になっていました。それから、いろんな学外の公務とか執筆依頼もどんどん押し寄せるようになってきて、そういった外的な変化とぼく自身の問題意識の転換とが重なったのかな、と思います。実は、90年代は社会主義圏の崩壊、エスニックな対立の露出、歴史学の来し方行く末という点で激動の時代でしたが、そうしたこともにらみながら、90年には二宮宏之さんと一緒に「対談　ヨーロッパを読みなおす—方法としての民族」[24]で討論し、ずっと後には総括的に「政治文化　何がどう問題か」を書きました[25]。

クリオ：ありがとうございます。いろいろ興味深いお話が出たのですが、まず、「政治文化」「政治社会」というキーワードについて伺わせていただきます。

これらの概念について先生は色んなところで言及されていますし、最近出た『歴史的ヨーロッパの政治社会』のように、タイトルそのものに掲げられた本もあるわけですが、先生はどのようなものと考えていらっしゃるか、もう1度伺わせてください。例えばその政治社会と政治文化といったものがどういった関係になるか、改めてご説明いただけるとありがたいです。

近藤：そうですね、「岩波講座世界歴史」の『主権国家と啓蒙』が99年の秋に出て[26]、その合評会が翌年の初めにありました。続いて『長い18世紀のイギリス——その政治社会』についても研究会の時があって、その両方で二宮さんとぼくは議論した。結局お互いの違いを確認するっていうことになりますけども。二宮さんは終始、「問題は文化だ」と言い続けていて、せっかくフランスのアナール派がsérieの歴史学から、読解の、読みの歴史学に転換して、ブローデル風の大きな議論じゃなくて、図像とかちょっとした兆候から大事なことを解読していくような歴史学に変身を遂げている。近藤君もそういうことをやっていたはずなのに、なんでポリティカル・ソサエティなんか言い出すんだ。それは歴史学における反動だ、逆流だ、ということだったんですね。ぼくは、その読解の歴史学はいいけれど、それだけで大丈

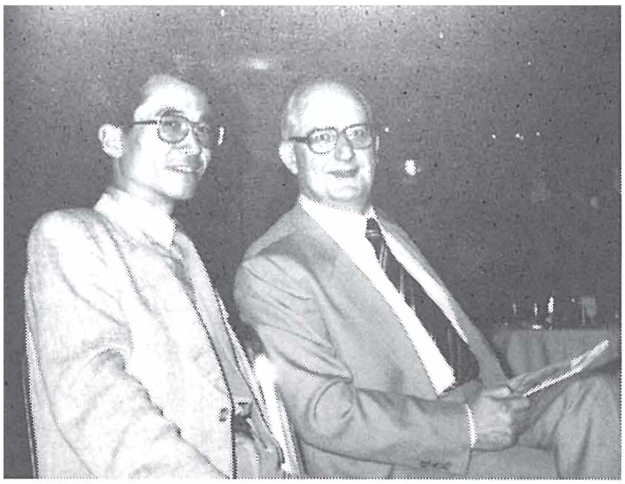
---

[24] 二宮宏之編『深層のヨーロッパ』（山川出版社、1990年）所収。
[25] 歴史学研究会編『国家像・社会像の変貌』（青木書店、2003年）所収。
[26] 『岩波講座　世界歴史16：主権国家と啓蒙　16-18世紀』（岩波書店、1999年）。

夫なのかな、という気持ちもありました。二宮さん自身の体の問題なんかもあって、色んな問題意識が内へ内へと繊細な方向に進んでいくのは理解できましたけども、でもみんなでそういう風にすべきなのか。もうちょっと、政治史じゃない政治社会、社会史・文化史を踏まえた政治への観点があるはずだし、それを追求していくことで思想史をやっている人たちとも対話ができるし、それから公共性とかレスプブリカとかいう議論もついてくる。ぜひ、そのポリティカル・ソサエティをキーワードにしてやっていきたい、ということで別れました。友好的にけんか別れしたわけです（笑）。学生に対する説明として言えば、かつての政治史、権力者の政治史、あるいは事件史・戦争史に戻ろうと言うのでは全然ない。むしろ社会史を経由しているわけだから、それを踏まえていることがひとつ。それから歴史学と思想史、政治思想史や経済思想史は全然別物として日本の学界で展開していますけれど、それではまずい、対話することはすごく意味あるだろうと思っています。それを積極的に進めたい、ということでもあります。もうひとつはハーバーマスをはじめとする、公共性、公共圏の議論にも積極的に関与していきたい。それは二宮さんの文化の歴史学では手に負えないんじゃないかという懸念です。

クリオ：ありがとうございます。そうしたテーマの転換ということから現在のことにお話を移したいのですが、先生は今再び、長年のテーマであるマンチェスタや、最近ではモラル・エコノミーを再考する、といったこともなさっています。最初、卒論でテーマを選んだ時にはこれがライフワークになるとは思わなかったという風におっしゃっておいででしたが、ライフワークになったモラル・エコノミーとマンチェスタというテーマについて、長く付き合ってみて思われることをいくつか教えていただけますか。例えば、先生が最初に関心を持たれたころと現在とで位置づけは変わったのでしょうか。

近藤：これはマンチェスタの市役所、タウンホールです。中世のカテドラルのないマンチェスタで、市民たちが建てた市民のカテドラルという位置づけですが、ヴィクトリアン・ゴシックの代表的な建物です。それから、これは町中の様子、これがジョン・ライランヅ・ライブラリー。ジョン・ライランヅという、「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」を一身に体現したような 19 世紀の資本家がいますけれど、この人の遺産でもって、敬虔なクリスチャンの民間図書館（チャリティ）としてこれを建てたわけですね。彼の遺産でもって未亡人が立派な図書館を作ってしまったところです。



こちらは市立の図書館（1851 年設立）なのですが、市役所と市電の駅に挟まれています。こういった市民的な豊かさというものが 19 世紀～20 世紀前半まで素晴らしかったマンチェスタが、今はこう、さえない所がいっぱいあります。現在のマンチェスタは何の産業もありません。

まぁ歴史的なマンチェスタ大学に続いて、新設大学がたくさんできました。あとはカジノのようなものをどんどん作っていこうっていう方針だったりして。それは歴史的な「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」を体現したようなマンチェスタのイメージを大転換することになってしまうんじゃないかと心配しています。

そのマンチェスタ市の設置でこういうプラークがありますが、1980 年代の後半のものです。Shudehill Fight とあります。 One of several food riots took place here. 4 people died and 15 were injured during the night of 14 - 15th November 1757 というので、ぼくの卒論でやった 1757 年 11 月の事件を記念するプラークです。ぼくの卒論は 1971 年、ぼくの論文があったからこのプラークができたかはわかりませんが（笑）、それは日本語だけども『社会運動史』のコピーを市立図書館に贈って、読む人もあったんです。80 年代からマンチェスタ・メトロポリタン大学というとこで、クレイグ・ホーナ[27]という若手が 18 世紀の公共性の議論をやっていて、ダグラス・ファーニ[28]という先生もいるわけですけれど、2 人のおかげで、それなりにぼくの名前もマンチェスタで知られているようです。こういうマンチェスタ市が労働党政権だったときに人類の進歩、民主主義の進歩、に寄与した事件のプラークは赤、進歩史観からみて全然意味のない遺跡とかそういうのは青、という風にしている。さっきの赤いプラークはそのひとつ。クレイグのような人がぼくのその日本語のものを一所懸命想像しながら読んでくれているなんてことを知ったりしますと、もっと早くから英語で発表しなきゃいけなかったなと考えます。

ダグラス・ファーニは写真の先生で、マンチェスタ生まれ、その大学の卒業で、南アフリカの大学経由で母校に戻ったんですけども、すごくいい先生です。日本人

---

[27] Craig Horner, 最近の編著に *The Diary of Edmund Harrold, Wigmaker of Manchester 1712-15*, Ashgate, 2008.

[28] Douglas Farnie (1926-), 主著に *The English Cotton Industry and the World Market 1815-1896*, Oxford University Press, 1979.

で彼にお世話になった人も多いと思います。日本にも何度か来ていて、彼の専門は19世紀から20世紀なんですけどもマンチェスタに関することは何でも知っているから、彼に聞けば分かる。ということで色々なことを教えていただきましたし、ローカルな新聞に紹介してくださって、ぼくのインタビューが記事になったり。そういったことや、さっき言いましたクレイグ・ホーナとの間をとりもってくれたり、本当に感謝しています。

クリオ：ありがとうございます。それではここからは後藤さん、伊東さん、辻本さんにもお話に加わっていただきます。

まず、先生がイギリスのオクスフォード、ケインブリッジ、ロンドン、マンチェスタの大学を経験していらっしゃる、ということについて伺わせていただきます。先生はイギリスで4つの大学を経験なさっていますし、去年は半年間のサバティカルでケインブリッジにいらっしゃっています。オクスフォード、ケインブリッジ、ロンドン、マンチェスタの4大学を振り返ってみて、それぞれの大学の思い出や、研究環境といったことを伺いたいと思います。

近藤：まず最初に留学したのがケインブリッジですからね、ケインブリッジが美しいし、一番だとは思いますけど、でもそれぞれの個性、楽しさがあるわけで。特にオクスフォードは古いというか、大学に加えて、都市としての面白さがあります。こういう一種イタリア風の建物がいくつもあるってこともそうですし、オクスフォードに客員で半年いたとき、何度もテレビドラマや映画のロケーションをやっているところに出くわしました。中世的な雰囲気、そういう絵を撮るにはオクスフォードに場面が多い、と思います。ただオクスフォードは何と言ってもカレッジの力が強いですから、30いくつのカレッジの力が強くてユニヴァーシティの力が弱い。それは中央図書館の利便性の差に現れていますけど、ユニヴァーシティ・センターがごく最近までオクスフォードになかった、とかね。今でこそインターネットが充実しているからオクスフォードでも学問ができるけれども、かつてはこんなところでどうやって学問していたんだろうなと思うことさえありました（笑）。すでに道が決まっていて、ひたすら調べて書くだけならいいんですが、とくに従来の仕切りをこえた広領域の研究は生まれにくい。でも、オクスフォードとケインブリッジは本質的には同じなんですね。同じだからこそみんな行き来するわけですが、どうもオクスフォードやケインブリッジにいる人は、相手がこんなにも違うという差異性の方に目が行ってしまう。説明にならないかな。例えば大学出版会です。東大出版会の建物はみなさんご存知ですよね。あれ知らないの。知らなくても済むような、バス停のおしまいにある2.5階建のさえないコンクリートの建物、あれで全部でしょ。それがオクスフォード・ユニヴァーシティ・プレスは

こういう立派な建物、奥行きがこれの2.5倍くらい。ほとんど宮殿です。ケインブリッジ・ユニヴァーシティ・プレスの場合は事務所はこんなに広くはない、でも町のど真ん中に19世紀の4階建ての館があって、工場は別となっているわけです。大学出版会のあり方にも表れているように、東大は日本で一番とかいっているけどもそれは井の中の蛙であって、世界的には25位とか言うのも甘いかもしれないと思います。

ロンドンの場合はまた違って、ロンドン大学はユニヴァーシティカレッジとかLSEとかロイヤル・ホロウェイとかいろんなとこの連合体ですから、一種慶應大学、法政大学といった感じで違う。それが集まった六大学連合といった感じでできていますので、どのカレッジ、もしくはスクールに行くかということで随分違ってきます。ただし、歴史学に関して言えば、歴史学研究所（IHR）が連邦中央政府みたいにしてありますから便利ですよね。交通の便もいいし、色んなことが集中している。他のスクールやカレッジの先生と、2週間に1度のセミナーで必ず会える、それはオクスブリッジに比べてもはるかにいいね。便利です。そして、日本からの研究者でもアメリカからの研究者でも、オクスブリッジに行く時間はない、でもロンドンのインスティテュートに行く時間はある、という人たちが集まりますから、そういう人たちのセミナー報告も含めて多く行われていて、ロンドン大学が持っている他にないメリットだと思います。他の地方大学についてはそれぞれ歴史と地理と人員に規定されて色んな事がある。報告をしたことがある大学というとサセックス大学だとかエセックス大学だとかレスター大学だとか、呼ばれて行ったときはそれぞれ見て交流して、いい印象を持っていますが。例えばレスター大学だったらピーター・クラーク[29]という人がそこの都市史の長だったときに行ったけども、そのピーター・クラークがいなくなったらどうなっているかはちょっと分からないし。地方大学はオクスブリッジ、ロンドンとはちょっと違って、中心にいる人によってそのカラーに染まりますから、その人がいなくなったらガラッと変わっちゃう。建物は同じだけど色んなことが全然変わっちゃう。それがフレキシブルだとはいえるけれども、例えば留学先を決めるときに不安定要素でもありますね。

後藤： 質問してもいいですか。セミナーの違いには雰囲気の違い以外にも何かありましたか。オクスブリッジとロンドンで。

近藤： それは本質的には同じだと思います。つまりみんな、たとえばジョアナ・イニスは3つの大学のそれに出ているわけです。むしろそのセミナーのチェアーの人、オーガナイズしている人の個性によって違ったりする。例えばロンドンの長い18世紀ならペニー・コーフィールドという個性的な先生が雰囲気を作っていますから、今では司会が彼女ではないとしても彼女の作った雰囲気というものがあって、それはやはりペニーのセミナーだなということがある[30]。でもイギリスの大学のセミナーは地方大学も同じですけれど、最初にあいさつが必要なくてすぐ本題に入るとか、

---

[29] Peter Clark, ヘルシンキ大教授。最近では *Cambridge Urban History of Britain* シリーズの General Editor を務めた。

[30] P・J・コーフィールド「インタヴュー　ロンドン／都市史／新しい歴史学」『思想』873号（1999年）で、オクスフォード大学とロンドン大学の違いが論じられている。

日本人がレディース・アンド・ジェントルメンなんてやったりすると、なんだこの変なのっていうふうになっちゃうとか。大学のセミナーが作っている雰囲気というのは本質的に共通していると思います。

後藤： 昔と比べては？

近藤： ぼくが一番最初にロンドンの IHR のセミナーに行ったときは、ボイド・ヒルトン先生が紹介状を書いてくれたんですよね。イアン・クリスティ先生[31]の政治史のセミナーに出るにあたっては、ほいと行って、ほいと出たら駄目だ、ちゃんと紹介状を持って行って挨拶しろ、と言ってくれたんですけども、それはボイドの個性じゃないかと思います。というのも、最初に行って見せたら、何だ何だという感じで先生だけじゃなくみんなも覗き込む感じで（一同、笑）。そういう、昔々の礼儀正しい雰囲気というのをボイドは知っていて、クリスティ教授に失礼があるとよくない、ということでそういう風にしてくれたのです。でも今はますますインフォーマルになってきていますよね。むしろ議論のメインボディで、アーギュメントで面白いこと言わないとだめってことでしょ。今、伊東君の先生を大映しにしようとしているんだけど、これがそのペニー・コーフィールド先生ね。独特の明るい雰囲気を持った方で色々盛りたてていただきました。

クリオ： ありがとうございます。ペニー・コーフィールド先生の話が出たところで、お聞きしたいのですが、留学中など先生がイギリスの歴史をご研究される中で知り合われたイギリスの歴史家の中で、コーフィールド先生も含めまして、先ほどお話にありましたイニス先生やレイヴン先生、そういった先生方とどのようにしてご交流を続けていかれたか、ということを AJC（Anglo-Japanese Conference of Historians、日英歴史家会議）などのことも交えてお話しいただければ幸いです。

近藤： イギリスで知り合ったイギリス人で、最初に「なんだ、こいつは？」って思った先生は、この人[草光俊雄先生]（一同、爆笑）。ホブズボーム先生の演習は面白くて満員で、そもそも部屋が広くないこともあって、窓枠に座ったり床に座ったりという人たちもいて満員でした。その中になんか正装をして、帽子もかぶって、どうみても日本人だなっていう男がいました。これがその、「くさみっちゃん」との出会いだったんです。ジョアナより後、ペニーなんかと知り合うより前に会い、彼はその時期ロンドンに住んでいて、ぼくがケインブリッジから名古屋に帰った後、彼はケインブリッジのニーダム研究所に移ったわけだから、それ以上の付き合いは続かなかったんですけど。

---

[31] Ian Christie, ロンドン大教授。

イギリスの先生方と知り合った中で、1987 年に京都の西陣でやったテクスタイル・カンファレンスですけれど、ここにその主要な人物がかなり出ています。真ん中にくさみっちゃんがいて、ぼくがどこにいるかというのは探してみてください。（写真を指し示しながら）マクシーヌ・バーグ[32]、パット・ハドソン[33]、ジョン・スタイルズ[34]といった人たちと出会うことになり、ダグラス・ファーニとは再会します。有意義なことでした。あと日本の経済史で、米川伸一先生、斎藤修さん、アジア史の杉山伸也さん、これが杉原薫ですね。ぼくが修士論文を書く前に信州大学に訪ねて行った武居良明先生といった人たちもいて、実は 80 年から 82 年の留学の時はひたすら勉強していたのであまりお付き合いをするということがなかった。今まで名前を挙げた人たちと知り合うことはあったけれど、お付き合いが始まるのは 87 年のテクスタイル・カンファレンスです。米川先生と科学史の吉田光邦さん、中岡哲郎さんのコラボレーションを草光さんがサポートして実現した国際シンポジウムでしたが、それに随伴して色んな事が始まりました。この翌々年にマーティン・ドーントン[35]が初めて日本にやってきてお付き合いが始まる、とかいうことです。88 年以降はむしろカルロ・ギンスブルクとかピーター・バーク、そしてキース・トーマスといった、社会文化史の大物たちが来日して本当によかったですけれど、イギリス史の人たちとの学問的なお付き合いがふたたび本格的に始まるのは 1994 年の AJC から、ということになります。

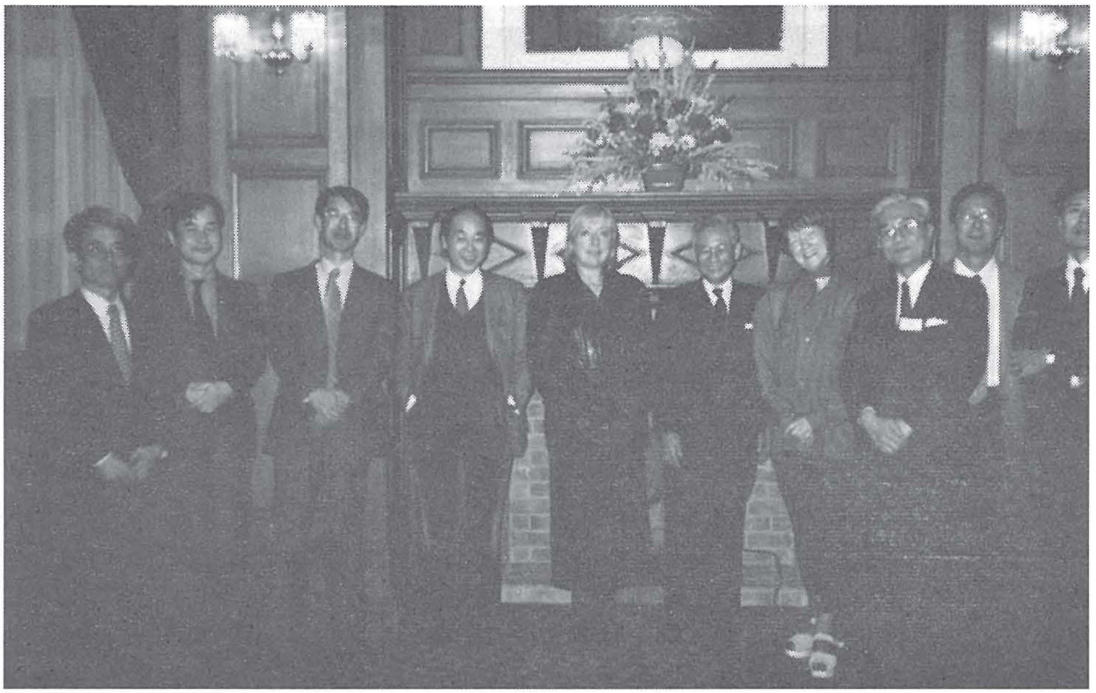
---

[32] Maxine Berg, ウォリック大教授。最近の著作に *Luxury and Pleasure in Eighteenth-Century Britain*, Oxford University Press, 2005.

[33] Pat Hudson, カーディフ大教授。大倉正雄訳『産業革命』（未来社、1999 年）。

[34] John Styles, ハーフォードシャー大教授。

[35] Martin Daunton, ケインブリッジ大教授。最近の著作に *Wealth and Welfare: An Economic and Social History of Britain, 1851-1951*, Oxford University Press, 2007.



これはその 94 年 9 月に AJC、日英歴史家会議がロンドンの IHR、歴史学研究所であって、3 日目、最後の夜に近くのヴィクトリアンな感じのラッセル・ホテルでディナーを設けてくださったときの写真です。全部をアレンジしてくださったパトリック・オブライエン先生[36]は写っていなくて、ここにペニーとパット・セイン[37]がいます。日本側で一番中心なのは鵜川馨先生でしたが、ぼくたちはまだこの年は付属でついていたようなものですけど、このときからいろいろ内容豊かな交流が始まると言えます。

クリオ：　ありがとうございます。さてここからは、教育者としてですとか、歴史家として今思うことを聞いていけたらと思います。ではまず、導入として学生についてについて伺いたいのですが、先生は以前、東大に赴任なさって 1 年目のクリオのインタビューで、学生についてどう思うかという質問に対し、「あいた口がふさがらない」ですとか、「あまりにも学生たちがものを読んでいない、読もうともしない」とか、「大学生がこじんまりしている」とかお怒りになっていらっしゃいました[38]が……。

近藤：　その通りです（全員、爆笑）。

クリオ：　20 年ほど経った今、同じ質問をさせていただきたいのですが、最近の学生や、また学生が書く論文などをご覧になって、どう思われますか。

近藤：　はい、その通りに、憤っていました。1988 年、89 年のぼくはね。要因としては、名古屋時代が極めて家族的というかフレンドリーというか、とてもよかったから、それが東大に来てみるとそうでもないということがひとつあったと思います。それから、ぼく自身がその時は 40 過ぎたばっかりで、今は 60 過ぎたところでそれだけ

---

[36] Patrick O'Brien, ロンドン・スクール・オヴ・エコノミクス（LSE）教授。秋田茂・玉木俊明訳『帝国主義と工業化 1415-1974　イギリスとヨーロッパからの視点』（ミネルヴァ書房、2000 年）。

[37] Pat Thane, ロンドン大教授。深澤和子・深澤敦監訳『イギリス福祉国家の社会史：経済・社会・政治・文化的背景』（ミネルヴァ書房、2000 年）。

[38] 「インタビュー　近藤和彦氏に聞く」『クリオ』第 4 号（1989 年）。

成熟しましたから、現実を受け入れるというようになっていますので、あんまり憤っていません（笑）。というよりも、歴史学は現実科学なんだから、現実を前提にしてものを考え始めるわけでして、今の学生がマルクスやヴェーバーを読んでいないからといってそれで駄目だというわけにはいかないということ、そこから出発する、というわけです。まずは今、学生の皆さんが何を感じたり考えたりしているのかっていうところから始まるんだと思います。とはいっても例えば、英語力とか、きちんとした日本語を書くとかいったところはトレーニング次第なんだと思いますから、厳しい発言をすることはこれからもあると思います。

クリオ： 現在では、例えばデータベースなどITの導入がされましたし、環境が変わってきたところがありますが、便利になったことで学生が書く論文の質が上がったとか、そういったことはお感じになりますでしょうか。

近藤： 卒業論文というのはすごく幅がありますから、駄目なものは昔からあったし今もあるし、素晴らしいものは今もあるし昔もあった。ただその素晴らしいというのが変わってきたのかな、と思います。昔はせいぜい東大の図書館にあるもの、あるいはどこかのマイクロフィルムを使って卒業論文を組み立てるとすると、アーギュメントが鮮明でないとどうしようもない。今はオンラインのリソースが随分あるわけですからそれを使って、それなりに華々しい卒業論文をまとめることも可能です。それから大学院重点化以来、東大の場合15年以上経っているわけで、それだけ学生たちがトレーニングされてきているわけで、修論については明らかに整った論文を書くケースが増えています、昔よりも。そういった点で変わってきていると思います。

クリオ： これもまた、先生が以前クリオのインタビューでおっしゃっていたことなんですが、「人文科学の場合は少しでも国民の生活を楽にするためであるという大義名分がないわけであるけれども、歴史学は社会的還元について積極的に社会にアピールできるような研究をしていくべきではないか」という質問に対し、「答えはイエス・アンド・ノウだな（笑）」という風にお答えになっています。しかし、現在は状況が効率化や無駄を省くとかそういった政府の指針も手伝って、学問も現実のポリティクスとの関係を考えていかなければならない時代になっていると思います。例えば、現在の状況下で、また同じ質問になりますが、歴史学が社会的還元についてアピールしていくような研究をしていくべきではないか、という質問をさせていただくとしたらどうでしょうか。

近藤： やはり答えとしては、イエス・アンド・ノウだと思います。ただその「還元」という言葉がちょっとひっかかります。「社会的に意味のある研究を」ということでしたら絶対的に「イエス」なんでしょう。やや生臭い話をしますと、学振のフェローとか、あるいは他の基金でみなさんが応募して何らかのフェローシップを得る、選考がありますよね。そうした場合面接にいくと、自分の研究とピッタリの、例えばドイツ中世史ならドイツ中世史、イギリスの19世紀ならイギリスの19世紀、とかをやっている審査委員はいないわけです。人文社会系の先生でインド哲学とか、経済理論をやっている審査委員の先生に対して、自分の研究がこういう意味があるんだということを言えないのはまずいと思います。研究することによって日本の国民

所得がこれだけ上がるんだと言う必要はないけれども、専門は別の、しかし知的な経験豊富な審査委員を、ふんふん、なんか面白いことやっているんだね、将来性ありそうだね、という風に説得できないのはおかしい。それを例えば5分か6分でいうことができないのは無能だ、と思います。ひるがえってぼくたちの場合でしたら、大学教授をしているわけだから、すごく細かい史料分析もやるわけだけども、時々そういうワイダーオーディエンス、ないしはリーディングパブリックに対し、難しそうだけれども面白いことをやってるんですね、と思わせるような仕事を少なくとも時々は発表しなくちゃいけない。でも、社会的実益、直近の有用性とは別です。そういう風に思っています。

クリオ： 一般の方に対してでは、どうお考えですか。

近藤： 一般というのはどういうことかっていうことになりますが、例えばご自分のおばさんとかおばあちゃんに対しても、本質的には、何から何まで説明できなくても、○○ちゃん何か面白いことをやっているのね、将来が楽しみだね、と思わせないといけないんじゃないですか（笑）。お年玉にも影響するかもしれない（笑）。我々の場合にはお年玉ではなくて民間の何とか基金、研究助成金ということになるのかもしれないですけども、やはり一所懸命に申請書を書いてアピールしているわけですが。難しいけども100%理解できないけども面白そうだ、可能性はあると、だから100万円とか何百万円とか出すに値すると判断してくださっているわけですよね。

クリオ： お年玉と研究資金の例えは……（笑）。

近藤： 同じだと思います（笑）。

クリオ： はい、とても分かりやすい例えでした（笑）。ありがとうございました（笑）。それでは次の質問に移らせていただきます。次の質問は、少し大きい質問になると思うのですが、歴史学とか人文科学とかの位置づけに関して伺いたいと思います。歴史学や人文科学は、先ほどの現実のポリティクスとの関係というのにもつながりますけども、まず日本ではどういう感じになっていくか、ということ。それから、それがイギリスにおいてはどうか、ということ。話が少し戻るかも知れませんが、イギリス史の立場、歴史学の立場とか、そういったものに関してもお話しいただければと思います。

近藤： 一昔前ですとね、日本では歴史学や人文科学はないがしろにされていると、ヨーロッパではそうじゃない、学問の雄ということでこんなにも大切にされているじゃないか、日本は遅れていると、そういう論理が成り立ったと思います。けれども、今では案外そうでもなくなって、イギリスの大学の先生たちも大変な思いをしていると思います。オクスブリッジはまだいいけれど、それ以外の大学の場合、お金の面でのダイレクトな影響を受けているし、それから、例えば授業料の問題にしても、これまで実質タダだったのが1年間に学生が何十万円も払うなんて、学問はもうお終いだなんて言説が広まっていますね、イギリスでは。日本の学生はすでに何十万円の授業料は払っているわけですから（笑）、それはどうかなという……。少なくともマスメディアで読む限り、向こうのひとたちのそういうのはちょっと甘いな、という気がします。ただ、欧米と日本とではっきりと違うのは、民間資金といいますか、チャリティの役割です。政府の予算とは別に、この研究は面白いというので

まとまったお金を出す人がいる、そういった人や団体に対してどうアピールするかということをやり手の研究者は常に考えている、ディヴィッド・キャナダイン[39]みたいな人はすごく上手にやっている、ということですね。日本では、科研費とか三菱財団とかそういったのはあるけれども、もっと大きい規模でドカンと獲得する民間資金はないんじゃないかという気がします、人文科学ではね。

そういうことがしかし、長期的にはハンディをもたらすか。ひとつ言えることはですね、少し遡りますけれども例えば、現在のイギリスの歴史学で活躍している人たち、ポール・スラック[40]とかマーティン・ドーントンとかハリ・ディキンスン[41]とかいう人たちの出身をみると、ダグラス・ファーニもそうですけど、貧しい家の出身でただ頭がいいだけで最高学府に進んでその後も色々フェローシップなどを受けながらきていて、今は歴史学界におけるそれぞれの大御所になっています。それはやはり戦後のイギリスにおける教育の民主化の成果です。まず授業料はただで、生活費をフルにサポートしてくれる、そして大学院を志望する段階で、こいつは優秀だということになると日本では考えられないような待遇がある。そういったことでこういった人たちが育てられてきたわけで、そのおかげをイギリス、おそらくイギリスだけじゃない、ヨーロッパのほかの国もそうでしょう、そうやって人文科学が富裕層だけじゃなくて、ヘテロジーニアスな出身の人たちに支えられてきた、そのことが今結実していると思うんですね。日本にはそれほどの優遇はなかったけれども、年間の授業料が 12000 円ということでずーっと 70 年代まできたからぼくのようなものが今あるわけだし、数十万円の授業料だったら親は大学に進めてくれなかったでしょう。それから 26 歳で助手にしてくれたから何とか家族も持ってまともな市民的な生活をするようになっているわけです（笑）。ですから今は、学部、大学院の授業料がこれだけ高くなったということはマイナス要因。しかしぼくたちのころにはなかった学振の DC とか PD とかいう制度がそれなりに充実しているということは改良点ですよね。だから良し悪しはあります。ただもうひとつ、欧米のような民間の篤志家が、こいつは優秀だから毎年五百万円ずつお小遣いをやろうという風に考える人が出てくるには税制の改正を考えないといけないわけで、つまり節税策としてそういうことをしてもいいシステムにならないといけない、それは現在の日本では許されていない。それは財務省、ないし政府中枢で真剣に考えるべきことだと思いますけど、明らかに無駄を省くとか、仕分けをするとかいう考えとは逆の、現代的な産業連関を考える発想だと思います。

クリオ： それではここから少し、イギリスと日本の環境の違いは学問環境の違いに表れているのかどうかというところを、留学を経験された 3 人の先輩方と対談していただきたいと思います。

---

[39] David Cannadine (1950-), プリンストン大教授。平田雅博・細川道久訳『虚飾の帝国—オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ』（日本経済評論社、2004 年）。

[40] Paul Slack (1943-), オクスフォード大教授。最近の著書に *From Reformation to Improvement: Public Welfare in Early Modern England*, Clarendon Press, 1998/1999.

[41] Harry Dickinson, エディンバラ大教授。中澤信彦他訳『自由と所有　英国の自由な国制はいかにして創出されたか』（ナカニシヤ出版、2006 年）。

例えばまず、イギリスの大学で勉強をしているときと日本の大学で勉強をしているときというのは、やはり環境が違うものなんでしょうか。

近藤：　大学院で比べると、本質的には違わないかもしれない。それぞれの専門・テーマを決めて個人主義的にずーっとやっていくわけで、教師の側もそれをサポートするけれど、本人が基本的にやるわけでしょ。それはあんまり意味ないからやらない方がいいよとか、こういう人に会ってみるといいよとか助言してくれるわけでね。おそらく、大きく違うのは学部教育なんじゃないかなって気がします。イギリスの場合は単位制度じゃないし、80 何単位揃えなくちゃいけないわけじゃない。義務教育の段階からそうですけども。standardize するのが日本の教育だとしたら、individual なよいものを出していく、もしかしたらこいつは genius かもしれない、genius だったらそいつを盛りたてるっていうのがイギリスの教育だし社会ですよね。

クリオ：　大学院教育でも学部教育でも、例えばゼミがありますけれども、そういったところの雰囲気だとか、学生の質だとかはイギリスではどのような感じなんでしょうか。

近藤：　それはむしろこの 3 人に聞きたい。日本から向こうの大学院に留学して最初のころ、言葉の面ではハンディを感じるだろうけれど、学問的な面で自分がこれまで勉強したことについて、劣等感と言うか、太刀打ちできないな、なんて思ったことありますか？

後藤：　最初はすごく心配して留学しました。それなりにセミナーに出て、もちろん全部わかるわけではないんですけれども、この話は私聞いたこともないとか、大きな話としてどの延長線上にある話をこの人はしようとしているのか、まったくわからないとか、まったく自分は時代遅れだという印象を持たなかったのは、ほんとにまともな教育を（日本で）受けたなぁと思いましたね。ただ、それは私、博士もだいぶ経ってから行っているので、その分はあるのかなぁとも思います。一緒に始めた人たちは、院に入ってきたばかりの、学部から上がってきたばかりの人たちもいましたので、そういう部分ではもちろん、私が修士で行っていたとすれば、まったく同じだと思えたかと言えば、とてもそう思えませんね。

伊東：　ぼく、あまり「太刀打ちする」とかそういう発想がなかったので（笑）、あまりそういう風に見た／考えたことはなかったんですけど、別の角度から言うと、今の話を聞いてて思い出したことがあります。大学院生で向こうに行ったときに、ティー

チング・アシスタントで、学部のゼミのようなものを受け持ったんですが、エッセイの添削のようなことをするんです。そのときは、日本で、例えば西洋史を専攻している学生の書いてる論文の方が内容的にはいいっていうか、そんなに差はないのかなぁと。逆に言うと、向こうの教育だとどうやってそこからもっと専門的に進化させていって、学部から大学院の段階に育てていくんだろう、ってことを非常に興味深く思いました。

後藤： やっぱりすごく違ったのは、前提事項がまったく違う。つまり、イギリスに行ってイギリス史のセミナーに出ていると、いちいち説明しなくていいことが、まずだーっとあって、その流れの中で……。

近藤： 国史だからね。

後藤： はい（笑）、その部分が全然違うかなと。西洋史という枠と一国史という枠で全然違う。

辻本： そうですね。逆に言うと、日本のセミナーとかに西洋史の枠で聞かれるようなヨーロッパ史の質問とか、そういう、広いところから見た質問を向こうではあまりされなかったっていう感じがしました。

後藤さんが言われたように、ぼくも修士論文でやっていたテーマを向こうのいろんな方に話を聞いていただいてコメントをいただいた時に、まったく自分がおさえていなかった議論であるとか、そういうのはあまりなかった気がします。

近藤： セミナーや学会でもそうですけどね。若手の人も積極的に質問したりするんだけども、その質問が、よくまぁ恥ずかしげもなくこんなこと質問するわ、っていう経験ありませんか？バカだなぁ、って……全然恥ずかしげもなく、きわめて基本的なことを聞きますよね。たとえば、何かちょっとしたフランス語のフレーズが出てきたりする。その意味なんて、日本人の院生だったら絶対大声で質問したりしない。それをやってますよね。

伊東： 誰が言ってたか忘れたんですけど、それに関して「あー、納得」って思ったことは、そういう質問があると、ほかの人が質問しやすくなるからいいんだって（笑）。ハードルを下げるから。contribution しやすくなると（笑）。

クリオ： 先ほどのみなさまのお話をうかがっていると、日本人であるとか外国人であるということが、イギリスにおいて逆にメリットとして働く面もあるのかな、という気がしてきました。それはよく先生がおっしゃっている「我々はイギリス史をやっているんではなくてヨーロッパ史をやっているんだ」というお立場と言いますか、モットーにつながってくるかと思います。そういう意識がイギリスではあまりない、というのが印象的でした。ではその一国史的な歴史の見方というのが、向こうでは、まぁ自国史ということもありますが、主流なんでしょうか。

後藤： セミナーによりますね。19〜20 世紀史をやっているところに行って一国史をやっているところはないしね。私がいたセミナーがたまたま国史セミナーであったので、そうだったというところがありますけれども。史料番号で議論が行われてました（笑）。若い院生がエルトン[42]批判というセミナーをやってまして。

---

[42] Geoffrey Elton (1921-1994), 主著 *The Tudor Revolution in Government: Administrative Changes in the Reign*

クリオ：インタビューの筋とははずれてしまうことになるんですけれども、モリル先生ですとかコーフィールド先生ですとか、そういった先生方は AJC なんかで拝見する限りでは、一国史という感じで語ってはいらっしゃらなかったと思います。先ほどゼミによって違うという風におっしゃっていたと思うんですけれども、例えばモリル先生やコーフィールド先生のゼミに出席なさったりとかご指導を受けられたりして、いかがでしたか。

近藤：まぁ、モリルは 17 世紀政治史の正統派ですけれども、キャパシティのある人で。たとえば同じ 17 世紀の修正主義であっても、ラッセルのような人だともっと狭い。モリルさんが三王国戦争のようなことを言ったのは、ご自身がカトリックだということもあるでしょうし、アングリカン・チャーチのイングランド中心、あるいはプロテスタントのイングランド中心といったものに対する距離感みたいなものが最初からあったんじゃないか。その分、ヨーロッパ近世史に対する目配りもあるんじゃないかという気がします。特にアイルランドのことをまともに扱うというのは重要なことで、例えばリンダ・コリの授業もぼくは 80 年、81 年に出ていましたけれども、アイリッシュに対する蔑視というか、貶めるような発言を平気でして、それで笑いをとって話を進めていくみたいな授業をやっている。それぞれの個性でもあるんだけれども、イングランドの政治史をやっている人たちの傾向性は、かなり最近まで続いていたような気がします。一国史でありかつイングリッシュ中心の歴史観がね。ようやく最近、そんなこと言ってられないってことになってきた。オクスフォード・ケインブリッジに欽定講座というポストがありますけれども、昔はそこに就く人たちはイングランド史に限定されていたと思います。最近は欽定講座教授の少なくとも 2 人に 1 人はヨーロッパ史の専門家、っていう傾向がある。要するに歴史学界を代表する教授としてヨーロッパ史の人を選ぶ、ってことが 80 年代、90 年代からはっきりしてきた。それは歓迎すべきことだと思います。

後藤：私の留学中には、モリル先生ご自身がヨーロッパでいろいろとカンファレンスに参加されたりとかなさってました。ヨーロッパの知的交流がいろいろ盛んになってくる頃だったのかな、っていう風に思ってます。なんていうんですか、プログラムがありますよね。

辻本：エラスムス・ムンディ？

後藤：そういうのでかなり人的交流が進んでますし、それからモリル先生の院生はいつも 15 人くらいいたりするんですが、オクスブリッジ卒の人が少数派になっているんです。結構いろんなところから取ってくださる先生なので。かつてのオクスブリッ

---

of Henry VIII, Cambridge University Press, 1953.

ジとは変わっているということで、先生ご自身がびっくりされている感じもしましたね。

近藤：（写真を指しながら）モリル先生はこちらの先生ですけれども、お酒も大好きな方で。このオールマイヤーはアイルランド人で、ダブリンで教えている女性ですが、モリルのお弟子さんですね。例の 1641 depositions のプロジェクト、あれはこの 2 人、つまりケインブリッジとダブリンと、それからスコットランドのセント・アンドルーズ大学でやっている、三王国戦争を地でゆく企画です。17 世紀の「虐殺事件」、要するにイギリスとアイルランドとの間の喉に刺さった骨、あるいはもっと深刻な問題かもしれない、あらゆる問題の根源がそこにあるのかもしれない、そういう事件についての史料をパブリック・アクセスができるようにする、それについてのブログも開設して質問に対するレスポンスをすぐにできるようにする、ということをやり遂げた。近隣諸国との関係を前向きに、知的に考えておられて、素晴らしいことだと思います。修正主義に対して、ぼく自身も含めて、1970 年代の日本の西洋史学界はマイルドなマルクス主義でしたからね。修正主義は右翼だって思い込んでいたので、モリル先生の仕事が達成したような、現代的な意味のあるプロジェクトは理解できなかった。松浦高嶺先生が、「修正主義は木を見て森を見ない学問だ」なんて批判をなさってましたけど、それは日本側の誤解だったと思いますね。

クリオ：ありがとうございます。これまではオクスブリッジのお話を伺っていましたが、例えばロンドン大学だと留学生の数という面でもオクスブリッジとは違うんじゃないかと思います。伊東さんはそういった、ワールドワイドというかグローバルな環境に身を置いてみていかがでしたか。日本の大学ですと日本人の学生がほとんどですが、特にコーフィールド先生はいろんな留学生を教えていらっしゃいますよね。そのへんはいかがでしたか。先ほど、日本とイギリスとでは前提事項がまったく違うというお話もありましたが。

伊東：　そうですね、ロンドン大学を先ほど先生は六大学連合に例えられてましたけれども、たぶんカレッジとかスクールによって全然違うと思います。ぼくの行っていたロイヤル・ホロウェイも、とても留学生が多いところでした。歴史学のデパートメントも、割と大規模なものだったので、普段はあまり接することがない院生というのも多かったんですが、年に 1 回くらい大学院生がお互いに研

究発表しあって、交流を深めていくというようなイベントがあったりしました。そこで質問もされましたし、自分も疑問に思ったりしたんですけれども、たくさん留学生がやってきていると、自分の国から見たイギリス史とか、そういう風な観点でやってる人が多かったです。で、その中で自分は日本という文脈を外して飛び込んで行ったという部分があったので、なんで日本人なのにイギリス史をやっているのって改めて問われたり、自分でも問い直さなければいけないのかなという風に思ったことはありました。

クリオ：「なんで日本人なのにイギリス史をやっているのか」というのは面白い問いかけではないかと思うので、ここで4人に改めて質問させてください。それではまず近藤先生、その質問を向こうの方に聞かれたらどのように答えられますか。

近藤：あまりそんな風には聞かれませんが、それこそ小澤征爾が向こうに行って、お前にモーツァルトもベートーヴェンもわかるはずはないと言われた、っていう時代が確かにあったんだと思います。でも80年代以降になると、日本はそれなりに世界的なプレゼンスもあったりするので、先進国の一員として知識人が外国の歴史や文化を勉強しているのは、当然だという反応じゃないですかね。こちらも、イギリス史をやってはいるが、人類文明の何か一番大事なことをやりたいわけで、その中のある局面、自分にとって縁があって、テーマとか材料とかいうのがあってやっているわけだから、ただイギリスオタクになろうとしているわけじゃないよ、という意識はずっとありましたね。それは今でもぼくの中にあります。

クリオ：後藤さんは。

後藤：私はその質問確かに受けました。「なんで日本人なのに」という風には言われませんでしたけれど、どうしてイギリス史を、イギリス17世紀を研究しているのかという質問はやっぱり受けましたね。それでたいてい私の答え方は、「私はフィールドとしてこれを選択しているだけ」であると。イギリスである、17世紀であるということに特殊な理由はなくて、ただ自分の関心が向いたフィールドとしてやっているんだと。私の関心はむしろ歴史というものにある、という風な答え方をしていました。

クリオ：辻本さんは。

辻本：その質問は、自分の専門、例えば学部の中で聞かれるというよりも、むしろもうちょっとカレッジレベルで他分野の人と話してるときに聞かれる、カジュアルな質問だと思うんですけど、そうですね、留学して初めてそう聞かれたときにちょっと答えにつまって、それからずっと考えています。ぼくもそこに関心があった、自分の大学の環境の中で、西洋史の授業を聞いたり本を読む中で、自分がやっているテーマに関心が移ってきたという風に話すようにしています。ただ先ほど言ったように、例えばイギリスで学会報告をするときに「なんで君がこれやんなきゃいけないの」っていうような質問はありえないような気がします。

後藤：それはないですね（笑）。

クリオ：伊東さんは。

伊東：ぼくもそうですね、さっき言われたようにカジュアルな状況でそのような質問が出るので、面と向かってオフィシャルな場でそのようなことを聞かれることはな

いと思います。そういうときはあまりぼくはうまく答えられないというか、あまり自分にとって本質的に重要な質問ではないのかなー、という気はします。一方で「方便」としては、状況によってこういう風に答えるというものはいくつか用意してはあります。先ほど少し生臭い話が出てきましたけれども、公的な資金をいただいていて、なんでイギリス史のことをやっているのっていわれたときに、やっぱりこう社会的な意義とかを説明しなきゃならないということはあると思うんですけど、自分がイギリス史をやろうとしていること、イギリスのことを研究する原動力に関わる部分で、その質問がぐさっと来るようなことはあまりない。あったら考えようかな（笑）。

クリオ： ありがとうございます。イギリスの歴史学でも日本の歴史学でも、学際的な交流があって、いろいろな学問から影響を受けて歴史学が作り上げられていくという面もあると思います。例えばイギリスにおいて、歴史学が他のディシプリンを援用するとか、印象深いエピソードなんかはお持ちでしょうか。

近藤： イギリスだけじゃないと思いますが、ヨーロッパの大きな大学では、歴史学部が独立した存在ですから、経済史とか法制史とか、国際関係論の人たちと同じ学部にいます。たとえばパトリック・オブライエン先生は経済史ですから、経済学者かというと、彼自身はヒストリアンだと思っているし、さっきのマンチェスタのダグラス・ファーニ先生も経済史ですけど、経済学よりは歴史学の方にずーっと親近感を持ってらっしゃる。パトリックの場合は、財政軍事国家論のもとになるような論文も書いておられるけれども、18 世紀の誰それについての伝記的な研究もするとか、まさしく人文学としての歴史学みたいなことに自分のアイデンティティがあるような気もしますしね。それだけ歴史学が持っているマグネティックな力が少なくともヨーロッパでは強い。日本ではどうなんだろう、ちょっと弱いんじゃないかという気がする。歴史学部がひとつもないっていうことも関係しますね。

伊東： 日本と比べて、歴史地理学、historical geography との結びつきだとか、あるいは科学史などとの交流がもっとある、という印象を受けました。

クリオ： ありがとうございます。それでは再び先生に伺いたいんですけれども、先生のテーマは学生運動ですとか、社会情勢と密接なかかわりがあったと伺いました。それでは、例えば今の社会をご覧になって、歴史学がどのように社会に関わっていくのがよいと考えられますか。またそうした関わりのあるテーマというのが、今の日本では、あるいはイギリスでは、どういうものが考えられるかという点に関して伺えますでしょうか。

近藤： 良い質問ですね。現在およびこれからどういうことをやろうとしているか、という風に答えていいですか。まずはもう 10 年以上出す出すと言っている『イギリス史 10 講』を今年中に出します。イギリス諸島の歴史をヨーロッパないし大西洋圏

との関係で見ていくということは、日本列島の歴史をアジアないしは太平洋圏との関わりで見ていくということとそっくり同じようでいて、かなり違うわけです。その違いと共通性みたいなものを出すことができれば面白いと思っていて、かなりやる気でいます。ただちょっと分裂してるのは、例えば『イギリス史 10 講』は、まぁ大学の先生たちや学生も読んでくれるでしょうけれども、むしろ岩波新書を購読するのは教養市民層、大卒の普通のサラリーマンたちですよね。その人たちにアピールする仕事と、アカデミックな仕事っていうのは、やはり姿勢が違うので、そこのところをどう調整するか。その切り替えは簡単ではないです。同時に人文系の学問は、物書きっていう側面があります、若い人にはそういったところで学問的に正確な文章を書くだけでなくて、ちょっと関心のずれる人に対してもアピールできるような、明晰で魅力的な日本語を書けるようにしてほしいなというのは常に感じています。それは、卒論や修論を書くときにはあまり言わないかもしれないけれども、もうちょっと歳がいって、パブリッシュする論文の 2 本目 3 本目ってことになってきた人には、テクニカルなことをふくめてそういう注文をつけることが多くなると思います。

クリオ： 先ほど先生のお仕事のお話を伺ったんですけれども、それとも関連しますし、また歴史学の位置づけという点とも関連しまして、先生は高校世界史の教科書の編集にも長く関わってこられたかと思います。小中高での歴史教育と大学での歴史学研究との関係は、これからどういう風になっていけばよいとお考えでしょうか。また、今まではどうでしたか。

近藤： 90 年代から中・高の教科書の編集・執筆にかかわっています。小学校についてはわかりません。近隣社会、ネイバーフッドを子供たちがどのように認識するかという点で、自分の家から学校までの地図を書いてみましょうとかそういうことから始まるんですよね。中学になると日本史をはじめとして基本的なことを習いますが、それをどうやって教えるのがいいのかということは現場の人たちがいろんなノウハウを積み重ねているわけで、ぼくたちが発言する資格はあまりないなという気がします。高校になると、突然大学の先生たちで教科書を書いている人たち、および大学入試の問題を作ってる人たちが、今の研究はこうなってるんだからと最先端を反映させたようなことを教科書に書いたり、入試問題に出したりすることがあります。それについてぼくは日ごろから疑問に思っていて、そういうことは大学に入ってからでいいんじゃないかなと思います。もうちょっと、高校教育まではオールドファッションであってもいいんじゃないかなって。でも同時に、あまりにもオールドファッションな、コミンテルン史観的なことが現場で教えられている場合には、それはまずいよ。もうちょっと、最近の歴史研究のことも配慮してくれと思うこともありますね。やや mixed feeling ですが、要するに、大学生と話をするのと、高校の先生たちと話をするのと、どっちが大変かといったら、明らかに高校の先生なんですよ（笑）。

クリオ： ありがとうございます。そろそろクリオが用意してきた質問については終わりになります。たとえば先生が 2011 年の現在、これから卒論のテーマを決めようとする学部生だったとしますと、先生はどのようなテーマを選ばれますか。

近藤： あらゆることがありうると思いますね。まずイギリス史を選ぶかどうか、わかりませんよ。もっと面白いものがあると言うかもしれない（笑）。それはあらゆるテーマだと思います。ただそのifっていうのはちょっとおかしいよね。今のぼくはいろんなことを知っちゃってて、いろんな見通しが立つ。このテーマでやると半年くらいかけるとこういうことでひとつの論文書けるだろうなってわかる。それでもって、今度4年生になる人たちとヨーイドンで競争したら、絶対ぼくの方がいい卒論書けちゃうもんね（笑）。イギリス史以外っていうハンディをつけてもね。それから近代以外、まぁ中世史でいいや（笑）、神聖ローマ帝国のどっかのあれについて、断然すばらしい論文を書くかもしれない（笑）。どんなテーマでもぼくは面白いと思うと思います、今4年生だったら。

クリオ： ありがとうございます。ではさらにifで伺います。「西洋史学だったら」どのようなテーマでも素晴らしい論文を書けると先生はおっしゃいますが（笑）、ではもし西洋史学を専攻なさらなかったら、どのような人生を選ばれたと思いますか。

近藤： 西洋史じゃなくて、例えば経済学や独文みたいなところに進学したとしたら、それまたifなんだけども、今みたいに生き生きしてなかっただろうな、と思いますね。つまり、西洋史って堀米先生がいたから選んだんだけれども、選んだ結果わかったことはすごくリベラルで自由で、また実に学問的です。有能な学生を歓迎してくれるところでね（笑）。先生たちの愛に育まれてぼくは育ったような気がする。でも、あんまりそうじゃない学科もあるのかなって。それから、他のどこかに進学していたら、大学院を希望せずに就職していたんでしょうが、その場合はもうぼくは編集者になるって道は決めてありました。ですから西洋史の大学院を落ちたら、浪人せずに岩波に行くっていう風に、自分の心の中は決まってました。

クリオ： 岩波というのは。

近藤： やはり、60年代〜80年代の岩波書店には特別な思い入れがありましてね。さっきも言いましたように、77年に合庭惇さんに出会うことになるわけです。合庭さんは何でもわかっていた人ですが、早くからIT化についてもすごい積極的でした。今、ほとんどすべての電子辞書に広辞苑が入ってますよね。これは彼の功績ともいえるかもしれない。当時の省庁の学術IT化なんとか委員でもあって、活躍していた人でもあるし。ただ、万が一ぼくが岩波に入っていたら、そんな有能な人が2年上にいて、ぼくはあんまり花開かず、地味な「誤植を見つけるのが得意な近藤くん」程度になったのかもしれない（笑）。

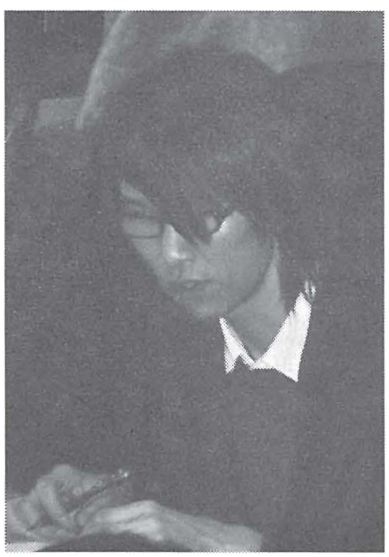
クリオ： ありがとうございます。現在が唯一絶対ではなかった、過去にはいろいろな選択肢がありえたという、先生がよくおっしゃっていることを体現なさるようなお話だったと思います（笑）。

それでは、次でクリオから用意させていただいた質問は最後になります。先生はこれからの歴史学というものについて、どういうものであるべきか、どうあらねばならないかということについて、後進へのメッセージということも含めてお話いただきたいと思います。

近藤： どうあらねばならないかということはわかりませんが、どうあってほしいかというと、やはりリーディング・サイエンスであってほしいですね。日本で、これまでそ

うじゃないですから。歴史好きっていう日本人は多いんですけれども。たとえば歴史小説などを読んで、いろんなトリヴィアをすごく知っている人は多いと思いますけれども、そうじゃなくて、少しでもものを考える人、あるいは専門職に就く人たちにとって、歴史が常識になっているような社会であってほしいな。それはもちろん、マスメディアや出版界も努力しないといけないとは言っても、ぼくたち歴史の専門家が、大学教授たちが率先してやらなくちゃいけないことでしょうね。例えば、樺山さんとか青柳さんのような人たちがメディアを活用しながらいろいろなさっていて、それはそれでとてもいいことだと思いますし、きちんとした情報を発信なさっていると思いますが。でも、歴史学の相対的な位置は、ぼくたちが学生の頃より下がっちゃってるんじゃないか。本が売れないっていうのもありますけども。しかし歴史学だけの問題じゃなくて、そもそも知的な作品を本で読むっていう風になってない。それこそ IT 化で、情報はタダでインターネットでゲットするっていう風になりつつあるんじゃないか。そういうことを嘆くだけではいけないっていうのもわかってるつもりです。一般学生とか、大学の先生をしてて歴史学じゃない人たちへのアピール力っていうのは、ずっと維持していかなきゃいけないんじゃないか。それは出版だけじゃなくてインターネットでの発言もあるんじゃないかな。ぼくのブログでの発言なんていうのは、きわめて微々たるものですけれども。

クリオ：　ありがとうございます。以上でクリオから用意させていただいた質問は全てになります。ただせっかくオーディエンスのみなさまや 3 人の先輩方にご同席いただいておりますので、ここからは質疑応答の時間を取りたいと思います。まったく即興の質問が出るかと思うんですけれども、先生よろしくお願いいたします。では、何かご質問なさりたい方は挙手をお願いします。



学生 1：　今日は面白いお話をありがとうございました。「最近の学生はものを読まない」というお話が以前あって、今はどのようにお考えかというご質問がありましたが、今はあまり憤りを感じられないというお答えで少し安心しました（笑）。それでは、古典名作を今ぼくたちが読むとしたら、先生がおっしゃったような自分の中から出てくる問いを見つけることになるのかなと思いました。先生が若い時に読まれて、一番影響を受けられた本ですとか、「座右の書」みたいなものがあったら伺いたいなと思います。

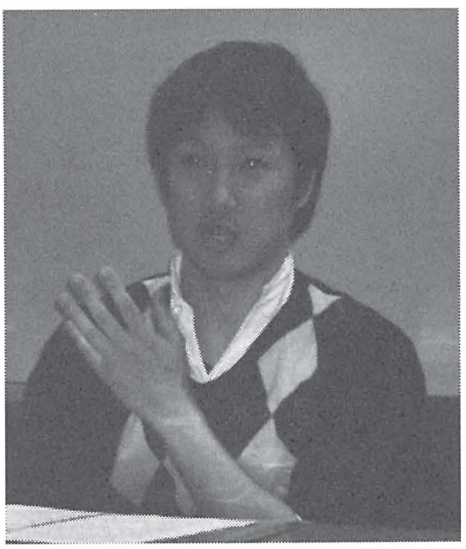
近藤：　それは、1 冊だけ挙げろというのは無理です。不可能です（笑）。ただジャンルとして言えば、岩波新書がある。中学生の時に岩波新書を読むといいんだ、って教わって、そうかと思って最初に読んだのが筑豊炭田のルポルタージュ『追われゆく抗夫たち』。そんなのから始まって徐々に、『実存主義』とかも読みました。でも中学高校時代には、読んだけれどもちゃんと血となり肉となったわけじゃない。赤ん坊が言葉を覚えるまでに、ただただ聞いて、バブバブ言ってるだけというのが 2 年も 3 年もある、それが中学高校時代の読書だったのかなという気がしますね。ようやく大学に入ってから、例えばサルトルなんかを読んで、うーん、そうなんだ、な

んてこいつはうまく言うんだろう、なんて思う経験が始まって、そして丸山真男とか、まぁE・H・カーの『歴史とは何か』は超難しいけど読んだ気になってた。で、内田義彦さんの『社会認識の歩み』なんていうのは、岩波新書なんだけどもすごーくよく考えて作られた本で、2度も3度も繰り返し読んで感銘しました。内田さんに直接お会いしたことはないのですけども。よい辞書をきちんと読むことがどんなに意味があるかってちゃんと教えてくれた人ですから、学生時代に読めてよかったと思いますね。マルクスだヴェーバーだっていうのも読んだけども、岩波新書なしにそれに突然入るっていうのは不可能なので。当時の岩波新書は、初版で5万部くらい刷ってすぐに10万部くらいは行ってました。今は違いますよね。今はそれこそメディアがどんどん増えて、このジャンルを読めば大丈夫っていう時代ではありません。インターネットでタダで得られる情報は、プリントした場合にほんの数ページ止まりでしょ。200ページ以上行きつ戻りつ読まないとまとまりのつかない事柄っていうのはあるので、それは紙の本を読むしかないんじゃないか。

学生1：ありがとうございました。

学生2：博士課程の学生なのであんまり初々しい質問にはならないんですけれども（笑）、伺いたいなと思ったことは2点あって、両方とも先生が影響を受けた、あるいは交流のある歴史家についての質問です。

1つめは先生の日本における西洋史の先達ともいえる人との関係なんですけど、先ほどフランス史の柴田三千雄先生と遅塚忠躬先生と二宮宏之先生のお名前を出されていたかと思います。特に東大の直接の指導教官、柴田先生との友好的な関係というお話もあったんですけども、どういう関係が展開されていたのか、どういう知的な影響を受けたのかという点について伺ってみたいです。



2つめはぼくがアメリカ史専攻ということもあるんですけども、先生は例えばリン・ハントだとかナタリ・デイヴィスだとか、そういったアメリカの歴史家、ヨーロッパ史家たちとの交流もあると思います。同じ外国史としてヨーロッパ史を研究されている歴史家たちとどういう交流があったか、どういうライバル心があったかということでも構いませんけれども（笑）、アメリカにおけるヨーロッパ史なんかにどういうお考えをもっているのかなという点を伺いたいです。

近藤：はい、すごく良い質問だと思うんですが、短時間で答えにくい。

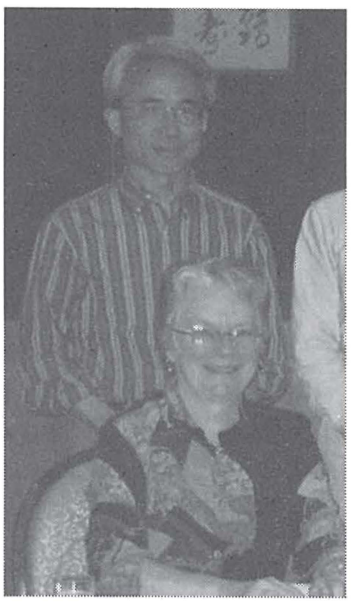
まず最初の質問については、ぼくは1968年に東大西洋史に進学しますけども、その前67年の10月から史学概論が始まるわけで、史学概論は柴田先生だったんです。で、2つテーマがあってね。マックス・ヴェーバーと歴史学っていうのと、日本における近代歴史学が明治以来どんな風に展開したかというの。この人はフランス革命だけじゃないんだって思った。まぁ柴田先生は大塚・高橋史学から出た講座派の鬼

っ子のような人で、労農派的な傾向が強かった人です。講座派っていうのは一国のタテ軸で、まずは民主主義革命って考える人たちで、日本共産党の理論的な支えですけども、東大に入った秀才たちは（笑）、日本共産党に対するものすごい違和感というか反感というか、そういうものが強いわけですよ。そうすると講座派は、日本共産党を支えるコミンテルンの理論ですから、もう、ダメ。労農派の、同時代的に世界史を見ていって、資本主義システムの破綻というものの必然性を明かす、そっちの理論が正しいんだという風に洗礼を受けるわけです。ところがある程度勉強してみてわかるのは、確かに経済学、東大の経済学部では労農派が圧倒的な影響力を持っていたけれども、歴史学をやってるまともな人で労農派っていうのはいないんですよ。なぜかみんな講座派で、丸山真男も、大塚久雄も講座派の代表であるわけだし。堀米先生のような人は、そもそも左翼に対する違和感を持っていた人だけれども、でもなんかこう、力強い柱みたいなものが通ってない。人間主義とか、人間の全体性とか言って、これで大丈夫なんだろうかっていうところがあった。若いぼくなんか、本郷に進学してから中世史から離れる、ひとつのきっかけになりました。そうした中で柴田先生は、大塚・高橋の影響があった中で、同時代的な連関を言っていて、東大に珍しい労農派だみたいな評価があったらしい。京都大学が比較的労農派が強いんですけども、そこからある時スカウトがあったって話を後から聞きました。柴田先生ご自身京都のお生まれですから、京大へ行くっていう可能性もあり得たんですけども、もし京都に行っていたら今頃、東大アカデミズムけしからんとか言ってたに違いないとか笑っておられた[43]。林健太郎先生がやはり共産党のこと嫌いだからということもあって労農派に近かった。向坂逸郎っていう労農派の論客ととても近かったということもあります。その林先生に、柴田先生はかわいがられています。そういうことでぼく自身、労農派の理論にシンパシーを感じながら、でも歴史学をやってみると、労農派のまともな研究者がいない。そういう悩みを抱えたぼくを見て、柴田先生は親近感を持って、育てようと思ってくださったのかもしれない。で、柴田先生は遅塚・二宮と 6 歳違いですけども親しくしておられたから、二宮さん、遅塚さんのことは早くから話に聞くということになりました。二宮さんはご病気もあって、73 年 11 月から交流が始まることになるんですけども、いろんな場面でご一緒しました。今年の『二宮宏之著作集』第 2 巻の解説にも書きましたけども、例の社会史の、「ル＝ゴフ・ショック」とか言ってるのは 1976 年 12 月の『思想』です。ル＝ゴフの日本における講演を二宮さんが流暢な日本語に訳されて、それでみんなが社会史って面白いって盛り上がることになるんですけども、みんな見逃してるんですが、同じ『思想』の同じ号にぼくの処女論文が載ってるんですよね（笑）。それがきっかけで、77 年になると、岩波の合庭さんや柴田先生が中心となって「社会史の会」っていうのを作って、研究会がはじまったわけです。柴田、二宮だけじゃなくて阿部謹也とか、網野義彦とか、石井進とか、安丸良夫とか、

[43] 同時代のシステムとして、ヨーロッパ世界の政治社会を論じたのが、柴田三千雄『近代世界と民衆運動』（岩波書店、1983 年）。ただし、こうした労農派的な世界史観は、『フランス史 10 講』（岩波書店、2006 年）では後退している。

そういった錚々たる人たちのまさしく末席を、ぼくはいちばん年下で汚すようなことがあって[44]、そういう形での勉強もあった。この人たちに感謝してます。授業は受けたことなくてもそれ以外のあらゆる機会に盛りたててくださった。

それから2点目の質問で、例えば1989年にリン・ハントが来た時には、柴田さんや遅塚さんが呼んだわけですけれども、彼らは英語がフランス語ほどには堪能でないってこともあって、面倒くさいから近藤に丸投げをしたみたいなこともあったわけです。そういうわけでリン・ハントといろいろお話ができる。ついでに岩波の合庭さんに「インタビューやってみようかと思うんだけども」ってもちかけたら「ぜひやってください」ってことになって、それを彼と一緒にやったのが『思想』に載ったりして[45]。そういうのはすごく楽しかったですね。でも、アメリカでヨーロッパ史をやってる人たちと連帯感を感じるかっていうとそれは難しい。彼らの方がはるかに厚い層をなして高い水準でやってると思います。特に戦後すぐのアメリカ人はすごく豊かだったから、自己資金でどんどん留学して、すごい仕事をやってたわけですね。（リン・ハントの写真を示しながら）今ではこんなおばちゃんになってるけども（笑）。やはりリン・ハントもナタリ・デイヴィスも、ぼくたちよりはるかに前を歩いているような気がします。今の時点で見てもね。それはフランス語の力っていうこともあるけれども、まぁ、どんどんフランスの知的世界とアメリカの知的世界の間を行き来している、それから周りの人たちもそれを盛りたてて、大学のアドミニストレーションなんかは彼女たちがやらなくてすむ、みたいなこともあると思います。それこそ文化史という面で、ぼくたちよりワンランク上の仕事を彼女たちはしてるわけです。そういう人たちと知り合って、インタビューを含めていろんな交流をさせてもらったのは、そりゃあ楽しかったし、励まされたし。



クリオ： ありがとうございます。他に質問させていただきたい方も大勢いるかと思うんですけれども、かなり時間も過ぎていることもありまして、ここで終わりということにさせていただきたいと思います。先生、今日はどうもありがとうございました。

---

[44] 『二宮宏之著作集』第2巻（岩波書店、2011年）437頁。

[45] リン・ハント「インタヴュー　母のこと／政治文化／ボディ・ポリティク」『思想』789号（1990年）。

発行年月	作品	タイトル	雑誌／『著作』	巻号	注記	学歴・職歴	学会等
1973・1	論文	産業革命前夜の民衆運動—マンチェスタ 1757～58年（上）	社会運動史	2	卒業論文より	人文科学研究科	
1974・9	論文	産業革命前夜の民衆運動—マンチェスタ 1757～58年（下）	社会運動史	4	卒業論文より	東京大学文学部助手（1974年8月～）	
1975・6	論文	18世紀イギリス史研究の視座	イギリス史研究	22			
1976・4	新刊紹介	都築忠七編『資料イギリス初期社会主義オーエンとチャーティズム』	史学雑誌	85・4			
1976・12	論文	民衆運動・生活・意識—イギリスの社会運動史研究から	思想	630			
1977・11	書評	岸田紀著『ジョン・ウェズリ研究』	史学雑誌	86・11		名古屋大学講師（1977年4月	
1978・7	新刊紹介	トーマス・トゥック著、藤塚知義訳『物価史 第一巻』	史学雑誌	87・7			
1978・12	論文	1756-7年の食糧蜂起について（上）	思想	654			
1979・1	論文	1756-7年の食糧蜂起について（下）	思想	655			
1979・5	動向	"原始の自由の衰退史" に触発されて	年報中世史研究	4			
1979・9	翻訳	（E. P. Thompson著）1790年以前のイギリスにおける社会運動	思想	663	＜特集＞社会史		
1980・3	書評	富岡次郎著『ゼネストの研究』	史学雑誌	89・3			
ケインブリッジ大学大学院							
1982・4	対談	剣橋放談：18世紀イギリス社会史とその若手研究者たちの巻	イギリス史研究	33			
1982・12	史料	18世紀マンチェスタ社会史：関係史料をどう捜すか	史学雑誌	91・12			
1983・3	史料	NRA, ESTCの刊行物と18世紀関連書誌目録	イギリス史研究	34		名古屋大学助教授（1983年1月～）	
1983・9	史学会例会報告	マンチェスタにおけるヘゲモニー集団—1700年～1850年	史学雑誌	92・9			

1983・10	新刊紹介	星名定雄著『郵便の文化史—イギリスを中心として—』	史学雑誌	92・10			
1983・10	書評	ジョージ・リューデ著、古賀秀男・志垣嘉夫・西嶋幸右訳『歴史における群衆:英仏民衆運動史 1730-1848』	社会経済史学	49・3			
1983・12	論文	ジョン・ライランヅと「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」	思想	714			
1984・2	新刊紹介	M・フォーカス、J・ギリンガム編集、中村英勝・森岡敬一郎・石井摩耶子訳『イギリス歴史地図』	史学雑誌	93・2			
1984・6	書評	商業革命・帝国・ジェントルマン—川北稔著『工業化の歴史的前提』	思想	720			
1984・10	新刊紹介	ジェームズ・ボズウェル著、中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝』全三巻	史学雑誌	93・10			
1985・3	史料	Town and County Directories in England and Wales, 1677-1822	名古屋大学文学部研究論集史学	31		マンチェスタ大学客員研究員(1985年)	
1985・3	新刊紹介	マーティン・ウィーナ著、原剛訳『英国産業精神の衰退:文化史的接近』	史学雑誌	94・3			
1985・5	論文	ヨーロッパ：近代：一般（1984年の歴史学界:回顧と展望）	史学雑誌	94・5			
1985・8	書評	小松芳喬著『鉄道の生誕とイギリスの経済』	史学雑誌	94・8			
1985・9	論文	1715年マンチェスタにおける〈恐るべき群衆〉	長谷川博隆編『ヨーロッパ』		名古屋大学出版会		
1986・2	論文	シャリヴァリ・文化・ホゥガース	思想	740	歴史における文化—シャリヴァリ・象徴・儀礼		
1986・2	新刊紹介	大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市1 ロンドン』	史学雑誌	95・2			

1986・3	史料	ホウガースの『ヒューディブラス』異版について	『ヨーロッパ史における国家と中間権力と民衆に関する総合研究』				
1986・12	小品	大きな輪郭、意味ある細部	木鐸	41			
1986・12・20	小品	現代文明と人間性	朝日新聞（夕刊）		朝日新聞名古屋本社		
1987・3	史料	The Workhouse Issue at Manchester: Selected Documents, 1729-35	名古屋大学文学部研究論集史学	33			
1987・7	翻訳	（E. P. Thompson著）民俗学・人類学・社会史	思想	757			
1987・8・10	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1987・9・5	小品	団塊の世代の同期会	朝日新聞（夕刊）		朝日新聞名古屋本社		
1988・3	論文	宗派抗争の時代：1720、30年代のマンチェスタにおける対抗の構図	史学雑誌	97・3			
1988・3	小品	松浦高嶺先生とのこと	『松浦先生とイギリス史ゼミ in the Age of St.Paul's University』				
1988・8・8	小品	上半期の収穫	週刊読書人			東京大学文学部助教授（1988年4月～）	史学会評議員（1988年6月～現在）
1988	小品	Reminiscences of Professor Chaloner	*Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*	85			
1989・1	新刊紹介	ピーター・バーク著、中村賢二郎・谷泰訳『ヨーロッパの民衆文化』	史学雑誌	98・1			
1989・2	論文	政治文化の社会史にむけて：『パリのフランス革命』・イン・コンテクスト	思想	776			

1989・5	論文	ヨーロッパ：近代：一般（1988年の歴史学界：回顧と展望）	史学雑誌	98・5			
1989・6	翻訳	（Carlo Ginzburg著）歴史における＜生けるもの／死せるもの＞	思想	780			
1989・6	評伝	ホブズボーム『反抗の原初形態』	『現代歴史学の名著』		中央公論社＜中公新書＞		
1989・8・14	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1989・9	新刊紹介	有賀夏紀著『アメリカ・フェミニズムの社会史』	史学雑誌	98・9			
1989・9	新刊紹介	本田創造編『アメリカ社会史の世界』	史学雑誌	98・9			
1989・10	翻訳	（Peter Burke著）新しい歴史学と民衆文化	思想	784			
1990・3	インタヴュー	（Lynn Hunt・近藤和彦）母のこと／政治文化／ボディ・ポリティク	思想	789	フランス革命と世界の近代化		
1990・3	インタビュー	近藤和彦氏に聞く	クリオ	4			
1990・4	共編訳	トムスン／デイヴィス／ギンズブルグほか『歴史家たち　Visions of History』			名古屋大学出版会		
1990・7	新刊紹介	S・ローバトム、L・シーガル、H・ウェインライト著、澤田美沙子・坂上桂子・今村仁司訳『断片を超えて：フェミニズムと社会主義』	史学雑誌	99・7			
1990・8	新刊紹介	中央大学図書館編『ジェレミー・ベンサム著作解題目録』	史学雑誌	99・8			
1990・8	論文	モラル・エコノミーとシャリヴァリ	『世界史への問い』6（民衆文化）		岩波書店		
1990・8・6	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1990・10	編集責任	『朝日百科 世界の歴史』99　18世紀の世界〈働く女たち〉			朝日新聞社		英国王立歴史学会フェロー（1990年9月～現在）

1990・10	書評	荻野美穂編著『制度としての＜女＞—性・産・家族の比較社会史』	思想	796			
1990・10	論文	複合社会と儀礼の象徴機能—イギリス皇太子結婚式と都市暴動	二宮宏之編『深層のヨーロッパ』		山川出版社		
1990・10	対談	（二宮宏之・近藤和彦）ヨーロッパを読み直す—方法としての民族（エトノス）	二宮宏之編『深層のヨーロッパ』		山川出版社		
1991・1	共編著	『歴史の重さ—ヨーロッパの政治文化を考える』			日本エディタースクール出版部		社会経済史学会 評議員（1991年～現在）
1991・1	共編著	『英国をみる—歴史と社会』			リブロポート		
1991・2	書評	マリー・コンティヘルム著『イギリスと日本—東郷提督から日産までの日英交流』	東京新聞／中日新聞				
1991・5	小品	（思想の言葉）世界史の教科書を書く	思想	803			
1991・8・5	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1991・9	新刊紹介	長谷川博隆編『権力・知・日常—ヨーロッパ史の現場へ—』	史学雑誌	100・9			
1991・11	書評	今井 宏編『イギリス史II（近世）』	史学雑誌	100・11			
1992・3	新刊紹介	田中英夫編『英米法辞典』	史学雑誌	101・3			
1992・4	小品	リード『反乱するメキシコ』	ちくま	253	現代叢書を読む		
1992・5	小品	ABCにHを加味して—歴史家とパソコン—	クリオ	6			
1992・5	論文	民衆文化史—方法の問題として	社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』		有斐閣		
1992・7・27	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1993・3	共編著	『過ぎ去ろうとしない近代—ヨーロッパ再考』			山川出版社		
1993・5	インタビュー	岸本美緒氏、近藤和彦氏に聞く。「東は東、西は西」か？	クリオ	7			
1993・6	新刊紹介	J・ルゴフほか著、二宮宏之編訳『歴史・文化・表象：アナール派と歴史人類学』	史学雑誌	102・6			
1993・8・9	小品	上半期の収穫	週刊読書人				

1993・9	新刊紹介	R・ラーセン編、高橋和夫監修訳『エマヌエル・スウェーデンボルグ：持続するヴィジョン』	史学雑誌	102・9			
1993・10	小品	知識人＝歴史家の死—E. P. トムスンを悼む	思想	832			
1993・10	論文	モップと騒擾法（1715年）	三田学会雑誌	86・3	＜特集＞社会史と文学		
1993・11	著	『民のモラル—近世イギリスの文化と社会』			山川出版社 ＜歴史のフロンティア＞		
1993・12	論文	モラルと表象—制作者・買い手・読み手	『講座 社会科学の方法』IX〈歴史への問い　歴史からの問い〉		岩波書店		
1994・3	共著	『現代の世界史』＜世界史A＞			山川出版社		
1994・4・29	書評	歴史認識の再考を促す	週刊読書人			東京大学文学部教授（1994年4月～）	史学会理事（1994年～1996年）
1994・8	小品	社会的結合と公共性—アメリカ史の／歴史学の新たな胎動—	アメリカ史研究	17			
1994・9	第1回　日英歴史家会議（AJC）					ロンドン大学客員教授（1994年9月～1996年1	
1994・12	書評	金井光太朗・遠藤泰生他著『常識のアメリカ・歴史のアメリカ—歴史の新たな胎動』	思想	836			
1995・6	論文	「二重革命」とイギリス	『講座 世界史』II〈近代世界への道〉		東京大学出版会	東京大学大学院人文社会系研究科教授（1995年4月～）	
1995・9	小品	寛容法（Act of Toleration）	『世界民族問題事典』		平凡社		
1995・10	小品	ロンドンの歴史家たち—参加観察	『歴史学がわかる』AERA Mook 10				
1996・2	小品	（思想の言葉）時間の批判に耐える	思想	860			
1996・3	新刊紹介	杉原四郎編『近代日本とイギリス思想』	史学雑誌	105・3			

1996・4	新刊紹介	坂井秀夫著『興隆期のパクス・ブリタニカ:一つの歴史認識論』	史学雑誌	105・4			
1996・7・26	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1996・8・9	小品	民主日本と大塚史学—「洋学の伝統」「民主近代派」を脊柱に—	週刊読書人				
1996・9	史学会例会報告記事	英国・帝国・文明・近代と歴史学	史学雑誌	105・9			
1996・11	連載	ブルームズベリの歴史学（1）	UP	25・11	東京大学出版会		
1996・11	小品	戦後史学の胚胎と死	史学雑誌	105・11	歴史の風		
1996・12	連載	ブルームズベリの歴史学（2）	UP	25・12			
1997・1	連載	ブルームズベリの歴史学（3）	UP	26・1			
1997・3	インタヴュー	（P・コーフィールド、近藤和彦）ロンドン／都市史／新しい歴史学	思想	873			
1997・5	論文	歴史理論（1996年の歴史学界—回顧と展望）	史学雑誌	106・5			史学会理事（1997年～1999年）
1997・7	新刊紹介	飯田鼎著『ヴィクトリア時代の社会と労働問題』	史学雑誌	106・7			
1997・7・25	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1997・8	評伝	大塚久雄	『20世紀の歴史家たち（1）』		刀水書房		
1997・9	新刊紹介	A・N・ポーター編著、横井勝彦・山本正訳『大英帝国歴史地図：イギリスの海外進出の軌跡（1480年～現代）』	史学雑誌	106・9			
1997・10	翻訳	（Natalie Zemon Davis著）贋者のリメイク—マルタン・ゲールからサマーズビへ、そしてその先	思想	880			
1997・10	翻訳	（Natalie Zemon Davis著）16世紀フランスにおける贈与と賄賂	思想	880			
1997・10	小品	デイヴィス（Davis, Natalie Zemon 1928～）	『歴史学事典』第5巻<歴史家とその作品>		弘文堂		
1997	小品	賢い選択、愚かな選択	東京大学文学部進学ガイダンス97				
1998・1	シンポジウム記録	シンポジウム「経済発展の比較文明学」	比較文明	13			
1998・4	インタビュー	ナタリ・デイヴィスの知的展開	iichiko	47			

1998・4	書評	青木康著『議員が選挙区を選ぶ：一八世紀イギリスの議会政治』	史学雑誌	107・4			
1998・春	小品	わたしの出会った歴史書	歴史書通信				
1998・6	著	『文明の表象　英国』			山川出版社		
1998・7・24	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1998・12	小品	ステイト・ペイパー（state papers）	『歴史学事典』第6巻<歴史学の方法>		弘文堂		
1998・12	小品	民衆史（history of the common people）	同上				
1998・12	小品	労働運動史（history of the labour movement）	同上				
1999・1	評伝	ナタリ・デイヴィス	『20世紀の歴史家たち（3）』		刀水書房		
1999・2	学会動向	第二回日英歴史家会議について	史学雑誌	108・2			
1999・6	小品	21世紀人にこそヨーロッパ史を	ヨーロッパ史へのいざない	創刊号	NHK学園		
1999・7・30	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
1999・9	編著	『西洋世界の歴史』			山川出版社		
1999・10	編著	『岩波講座 世界歴史』第16巻〈主権国家と啓蒙 16-18世紀〉			岩波書店		
1999・10	論文	構造と展開：近世ヨーロッパ	『岩波講座 世界歴史』16巻〈主権国家と啓蒙〉		岩波書店		
2000・1	小品	後ろ向きに未来に入ってゆく	『これからどうなる21―予測・主張・夢―』		岩波書店		
2000・7・28	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2000・9	書評	住谷一彦・和出強編『歴史への視線:大塚史学とその時代』	社会経済史学	66・3			
2000・12	小品	（巻頭エッセイ）幸運な遭遇	多分野交流ニュースレター	30	東京大学文学部		
2001・1	小品	イギリス産業革命と世界史	Wedge				
2001・2	評伝	E・P・トムスン	『20世紀の歴史家たち（4）』		刀水書房		

2001・4	小品	読むという行為	季刊・本とコンピュータ	16			
2001・7・27	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2001・8	論文	日本の歴史学における近代派の伝統 — 福沢諭吉・マルクス主義・大塚久雄	『日英交流史1600-2000』第5巻〈社会文化〉		東京大学出版会		
2002・3	報告書	西ヨーロッパにおけるルネサンス像の再検討			科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果		史学会理事（2002年～2004年）
2002・4	編著	『長い18世紀のイギリス—その政治社会』			山川出版社		
2002・5	論文	グローバル化の世界史＜世界史の研究（191）＞	歴史と地理	554	山川出版社		
2002・7・26	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2002・12	論文	The Modernist Inheritance in Japanese Historical Studies	*The History of Anglo-Japanese Relations 1600-2000*, vol. 5		Palgrave		
2002・12	史学会第100回記念大会講演要旨	全体討論	史学雑誌	111・12			
2002・12	同上	比較史のかなた:近現代史におけるトランスナショナルな方法	史学雑誌	111・12			
2002・12	同上	修正主義をこえて	史学雑誌	111・12			
2003・2	論文	政治文化　なにがどう問題か	『現代歴史学の成果と課題』II：国家像・社会像の変貌		青木書店		
2003・3	共著	『現代の世界史』＜世界史A＞三訂版			山川出版社		
2003・7・25	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2003・12	編著	*State and Empire in British History: Proceedings of the Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians*			日英歴史家会議	オクスフォード大学リナカ学寮 Senior Member（2003年9月～2004年3月）	
2004・3	共著	『新世界史』＜世界史B＞			山川出版社		

2004・7	小品	オクスフォードの新DNB—まさにイギリス的な、古くて新しい国民的プロジェクト—	Maruzen Announcement		オクスフォードDNB新版によせて		
2004・7・30	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2004・8	論文	「イギリス革命」の変貌—修正主義の歴史学	思想	964			
2004・9	史学会例会報告	史学会例会報告	史学雑誌	113・9			
2004・11	論文	修正主義をこえて	『歴史学の最前線』		東京大学出版会 2002年史学会大会より		
2005・7・29	小品	上半期の収穫	週刊読書人				史学会理事（2005年～2007年）／理事長（2006年～2007年）
2005・12	公開シンポジウム「18世紀の秩序問題」第103回史学会大会報告	マンチェスタ騒擾とジョージ一世をつないだフランス語文書	史学雑誌	114・12			
2006・3	共著	『近現代ヨーロッパ史』			放送大学教育振興会		
2006・4	報告書	東京大学公開講座「人口」講義要項 104			東京大学総合研究所		
2006・4	編著	ジョン・ブルーア著『スキャンダルと公共圏』			山川出版社＜山川レクチャーズ＞		
2006・5	論文	歴史理論（2005年の歴史学界—回顧と展望）	史学雑誌	115・5			
2006・6	小品	二宮宏之からの遺贈	思想	986	二宮宏之氏を悼む		
2006・7・28	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2006・12	共編	*Migration and identity in British History. Proceedings of the fifth Anglo-Japanese Conference of Historians*			日英歴史家会議		
2007・2	論文	The Church and politics in disaffected Manchester 1718-31	*Historical Research*	80	Blackwell		
2007・3	報告書	近世・近代のヨーロッパにおける政治社会			科学研究費補助金・基盤研究（A）研究成果		

2007・5	小品	The days with the Days	クリオ	21			
2007・5	論文	総説（2006年の歴史学界—回顧と展望）	史学雑誌	116・5			
2007・7・27	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2007・9	史学会例会報告	史学会例会報告	史学雑誌	116・9			
2007・12	論文	チャリティとは慈善か—公益団体のイギリス史	年報都市史研究	15	特集 分節構造と社会的結合		
2007・12	共編著	『江戸とロンドン』〈別冊　都市史研究〉			山川出版社		
2008・2	小品	2007年読者アンケート	みすず	557			
2008・5	編著	『歴史的ヨーロッパの政治社会』			山川出版社		
2008・7	論文	Lost in translation? Documents relating to the disturbances at Manchester, 1715	*Manchester Region History Review*	XIX			
2008・7	書評	Oates, *The Jacobite Invasion of 1745 in NW England* (2006)	*Manchester Region History Review*	XIX			
2008・7・25	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2008・8・5	小品	（青春の一冊）歴史とらえようとする壮大な意志—『資本論』カール・マルクス著	東京大学新聞				
2008・11	小品	私のすすめる岩波新書	図書	717			
2008・11	報告書	2008年外國人著名學者招請講演會'Ukiyoe and the Westminster Bridge: cultural exchanges before *Japonisme*			慶北大學校		
2009・1	論文	日本の現在と将来	日本歴史	728	新年特集 日本史研究に望むこと		
2009・2	小品	2008年読書アンケート	みすず	568			
2009・7・31	小品	上半期の収穫	週刊読書人				
2010・2	小品	2009年読書アンケート	みすず	579			

2010・7・23	小品	上半期の収穫	週刊読書人			ケインブリッジ大学クレアホール学寮客員フェロー（2010年4月～9月）	
2010・8	論文	聖俗の結合	伝統都市4『分節構造』		東京大学出版会		
2010・10	共編	*British history 1600-2000: expansion in perspective. Proceedings of the sixth Anglo-Japanese Conference of Historians*			日英歴史家会議		
2010・10	編著	『イギリス史研究入門』			山川出版社		
2011・1	2010年度史学研究会大会講演要旨	モラル・エコノミー論を歴史的に再考する—ディジタル・アーカイヴによるE・P・トムスン再審	史林	94・1			
2011・2	小品	2010年読書アンケート	みすず	590			
2011・4	解説	解説	『二宮宏之著作集』第2巻（深層のフランス）		岩波書店		